

く、恐慌前すなはち一九二八——二九年において尖鋭化し明瞭に生産過剰に悩みつゝあつたのである。

(ロ) これに加ふるに、これら中央ヨーロッパの諸國は世界の債務國で、外國からの借入れによつて國の經濟を運轉してゐた。實に、ドナウ諸國は戦後金融資本主義國の最もよい放資地であつたのである。この事は何も農業國にかぎらず、オーストリアやドイツについても同じである。

(ハ) しかも、この外國からの借入は多く短期の形で行はれてゐた。短期資金の増大と國際金融諸市場の間におけるその流動は、戦後世界經濟の特徴の一つである。戦前で、對外投資は最も収益性の多い長期資本の形で、しかも生産的部面に對して行はれてゐた。ところが、戦後には、世界の資本主義がより不安定になりより、不確實となつたところから、對外投資はむしろ短期の形で行はれ、しかもその投資方向たるや安全第一主義の建前の下に決定され、生産的活動の相對的萎縮につれて投機利得の獲得に向つたのである。總じて戦後における國際資本の動きはその健全な基底を缺き、極めて神經過敏となつてゐたのである。かくて、本來ならば、長期借入れによるべきものさへも、外國からの短期借入金によつて購はれたのである。

(ニ) そればかりではない。ヨーロッパの農業諸國が顯在的な生産過剰に悩んでゐた丁度その頃、即ち一九二八——二九年には、世界の主要債權國から債務國にむけらるべき資本供給量も減少しかけてゐたのである。例のウォール街のブームはアメリカの地方資金ばかりでなく外國の短期資金をも盛んに吸収した。戦前の債務國から戦前一躍して世界の債權國に轉身した。流石のアメリカでも、當時外國投資のための資源は非常に萎縮した。一九二八年以後、フランスの貨安定によつて世界金融制覇に乗出してきたフランスでは、アメリカの對外貸付の減少に先だつてすぐに一九二八年には在外短資の還流がはじまつてゐた。イギリスは一九二九年やつと額面上戦前の對外投資水準を恢復したくらゐで、まだ一餘裕はできてなかつた。當時の國債の多くは短期資金の形で問題のヨーロッパ諸國に貸付けられてゐたのである。

(ホ) 最後に、以上列記の經濟的事情の外に、歐洲大戰の結果、中歐の政治的地理的關係が非常に面倒になり、そのため、その間における經濟的均衡が破壊されるに至つたことを附言しておかねばならぬ。このことは、世界金融恐慌が中歐、就中、オーストリアから起つたかを説明して呉れる。

以上要するに、中央ヨーロッパは戦後世界經濟の最も弱い一環をなしてゐたわけである。そ



の生産部面において、はた又、信用部面において、中央ヨーロッパは戦後における世界經濟の不均衡發展の最も劣弱な焦點をなしてゐたのである。

#### (四) 金融恐慌と國際短資の動き

金融恐慌が中央ヨーロッパから爆發するや國際資金はどんな動きをとつたか？ そして、その動向が更に金融恐慌の發展にどんな影響を及ぼしたか？

(イ) 先づ、問題のオーストリアについてみれば、早くから入超をつゞけ、支拂勘定の大部分は外資の輸入に俟たねばならなかつた。オーストリアの諸銀行における外國短資だけでも、恐慌前には約八億二千萬シリングに達し、例のクレデット・アンシュタルトが最も多くこれを利用してゐたのである。尙ほこの外に銀行を通ぜずして直接商工業に融通された部分も可成りあつた。隣接農業國が深刻な恐慌に陥り、延いてオーストリアの不安が昂進するとみるや、これらの巨額な外國資金はそゞくさと引揚げられて、こゝに金融動亂を惹き起したのである。

(ロ) ドイツでも、戦後引續き入超おまけに彼の老大な賠償支拂の負擔を背負つてゐるので、これ又老大な外資を輸入せねばならなかつた。しかも、それが漸次、短期資金として借入

られ、これを長期資本として運轉しなければならぬといふ状態だつた。一九二九年末、銀行の外資借入(短期)だけで八十六億マルク、その他短資を合せると約百十億マルクにも上つてゐたのである。オーストリアにパニックが起るや、フランスをはじめ債權國は續々と之を引上げやうとした。

(ハ) ドイツを引上げた短期資金は一應ロンドンに入るものが多かつた。ところが、これより先き、ロンドンにも世界の短期資金が相當集まつてゐた。例のマクミラン報告にもあるやうに、「戦後のロンドン金融市場には、戦前、ロンドンの國際引受業務のために技術的に集中してきた外國預金の外に、單純に投資として外國短期資金が、或は預金の形で或は磅爲替の形で集まつてきてゐた」しかもそれが多いときは三億磅、少くて二億五千萬磅以上にも上つてゐたのである。これを例のシチー銀行が利用し、利廻の關係上、しかも長期投資に充てゝゐたのである。ところが、ドイツのダーナート銀行の支拂停止となるや、在來の外國短資は勿論のこと、新しくドイツから逃げ込んだ資金も息つく間もなく、佛、米、和、スイス、白等の債權國から引揚を命じられたのである。これには勿論、イギリスの經濟的行詰りと政治的不安から、磅貨の將來に不安が生じたことが重大な原因ともなつてゐる、引揚げにたまりかねて、イギリ



スはついに同年九月突如として金本位を放棄し、世界金本位系崩壊の口火を切るに至つたのである。

(三) かうした事情の中にあつて、今度はアメリカに支拂番がめぐつてきた。佛、和、白、スイス等、銀行預金、商業手形その他の短期債権を保有してゐた國々は、文字通り狂熱的に、今度はアメリカから、これら短期債権を金にかへて引き上げはじめた。アメリカの金保有高は八月末の四、九九〇百萬ドルから十月までに七億ドルを失つた。

この間、イギリスの金本位停止に次いで同年十二月には日本も同じ経路を辿るし、かうして國際短期資金は轉々として諸國間を流轉し、僅少の利鞘を追つては直ちに流入し、わづかの不安を感じては直ちに怯えて引上げられ、行きがけの駄賃として餘りにも大き過ぎる負擔を行く所去る所に残して行つたのである。國際資金のかうした大超過敏性の中、最近世界經濟の不安定性が躍々と反映してゐるのである。

### (五) 金融インフレーション

一九三一年の金融恐慌は異常に深刻且つ廣汎であつたところから當該政府の積極的援助を必要とするにも、また恐慌が國際的のものであつたから、嘗てない諸國間の共同工作も行はれた。しかし、この共同工作の裏面には、世界金融資本制覇における尖鋭な對立もかくされてゐるのである。こゝでは、先づ諸國政府の金融恐慌對策即ち、金融資本への國家的援助から始め世界金本位制の崩壊並びに諸國における銀行組織の改造について多少述べることにする。

各國が金融恐慌に襲はれるや當該政府はその直接的救済のため信用インフレーションの途を採らざるを得なかつた。まづオーストリアではクレヂット・アンシュタルトの整理金一億六千萬シリングのうち一億シリングの國家支出を必要とした外に、オーストリア・クレヂット・アンシュタルトの救済費のうち七億シリングが國家の負擔となり、且つまた同行預金を全部保證せねばならなかつた。ドイツでは政府ダーナート銀行の整理に當つて預金保證を引受け、同行の手形及び引受業務の履行を保證した。更らにドレスデン銀行の優先株三億マルクを引受けてその破産を防止した。また、主要銀行業者の相互扶助協定によつて設立された「引受保證銀行」の資本金二億マルクのうちその四割を政府は保證した。



轉じてイギリスにおいても政府はシチー銀行のため海外信用を設定せんとして懸命の努力を惜しまなかつたし、アメリカにおいても、例の「全國信用會社」引きついで、「復興金融會社」を設立して銀行の救済に當つた。フランスにおいても政府はバンク・ナシオナル・ド・クレヂの破綻にあつて、その預金債務の總額を引受け保證した。等々……。

### (六) 金本位制の崩壊

諸國は恐慌對策として遂に金本位を放棄した。それは恐慌に對する對策として採られはしたが本質的にはむしろ恐慌の發展であり、當然の歸結である。金本位を離脱しない國は、爲替管理、輸入管理、またはその他の方法によつて國際的資本及び商品取引に嚴重な制限を設けてその國際收支の惡化を防止しなければならなかつた。

世界金本位制の崩壊は一九三一年九月、イギリスにはじまる。これより先きアルゼンチン、オーストラリア、ウルガイ（以上、一九二九年十二月）及びメキシコ（一九三一年七月）が金本位を離脱してゐたが、これは、これら諸國における農業恐慌の發展がその根本事情となつてをり、それに、イギリスの金離脱前における磅貨の下落が競合して起つたのであるが、しかし

これは未だそれ自體としては世界の金本位體系を破壊するほどのものではなかつた。だが、一旦イギリスが之を放棄するに及んで、その世界的慢延の口火は切られた。これに續いて先づ帝國諸國が金本位を投げ出した。磅爲替を基礎として所謂金爲替本位を採用してゐたこれら諸國としてはさうするより外に仕方がなかつたのである。のみならず三一年末までに英領以外十ヶ國が金本位を離脱し（日本は十二月）、三二年には更に六ヶ國、三三年には遂にアメリカ及びエストニアが離脱した。今日、名目上のみでなく實質的にも金本位を維持してゐる國はわづか十ヶ國あるのみである。

いふまでもなく、世界經濟は各國の金本位制によつて自然的聯繫をもつてゐる。だからかうした金本的制の世界的崩壊によつて世界經濟の各環をつなぐ連鎖が破壊されたのだ。しかも、それが老大國イギリスに始まつたとこに決定的な重大さを有つてゐる。これを切つかけとして世界經濟は一國或は數國を夫々の独自の經濟地域とするブロック圏に分裂し、國際間の信用は完全に地をはらつて國際資本市場は硬塞し、金の退藏及び不自然な移動のみが生じた。それは必然に貿易へとひどい打撃を與へた。



(七) 通貨價值の下落——磅、弗及び圓

世界金本位制の崩壊によつて各國の爲替相場には大變動が起つた。金本位停止國の通貨價值はもちろん何れもその金平價に對して多かれ尠かれ減價するに至つた。この低爲替を土臺として所謂爲替ダムピング的輸出の増加政策が採られた。しかし、一國の爲替ダムピングには他國の爲替ダムピングを以て對抗される。結局、爲替低落のひどい國程有利だといふので、その重壓は金本位國に一番重く加へられた。

いま試みに磅、弗及び圓貨のそれらの價值下落率（金平價に對する）をみると、三一年の九月及び十二月に金と縁を切つた磅及び圓は同年末に早くも三〇%の價值下落をみせ、以來、磅は幾分の軟調をみせつゝも大勢としては三〇——四〇%圏内で安定してゐる。これに反し、圓貨は三二年末までに一度に六〇%まで下落し、そしてその上ではじめて、大體、磅貨の動きに照應しつゝ安定を保つてゐる。

磅貨の相對的安定は、三二年七月の爲替平衡資金の設定によつて積極的に安定策が講じられた結果であり、三三年以後における圓貨の相對的安定は、意識的に磅貨に對して一定率の低落

率を持たせんとする爲替政策によるものである、反面三三年四月にはアメリカの金本位停止が

あつて、弗貨も急落し、三四年に入り、一月末の平價切下げによつて初めて安定を取戻すやうになつた。

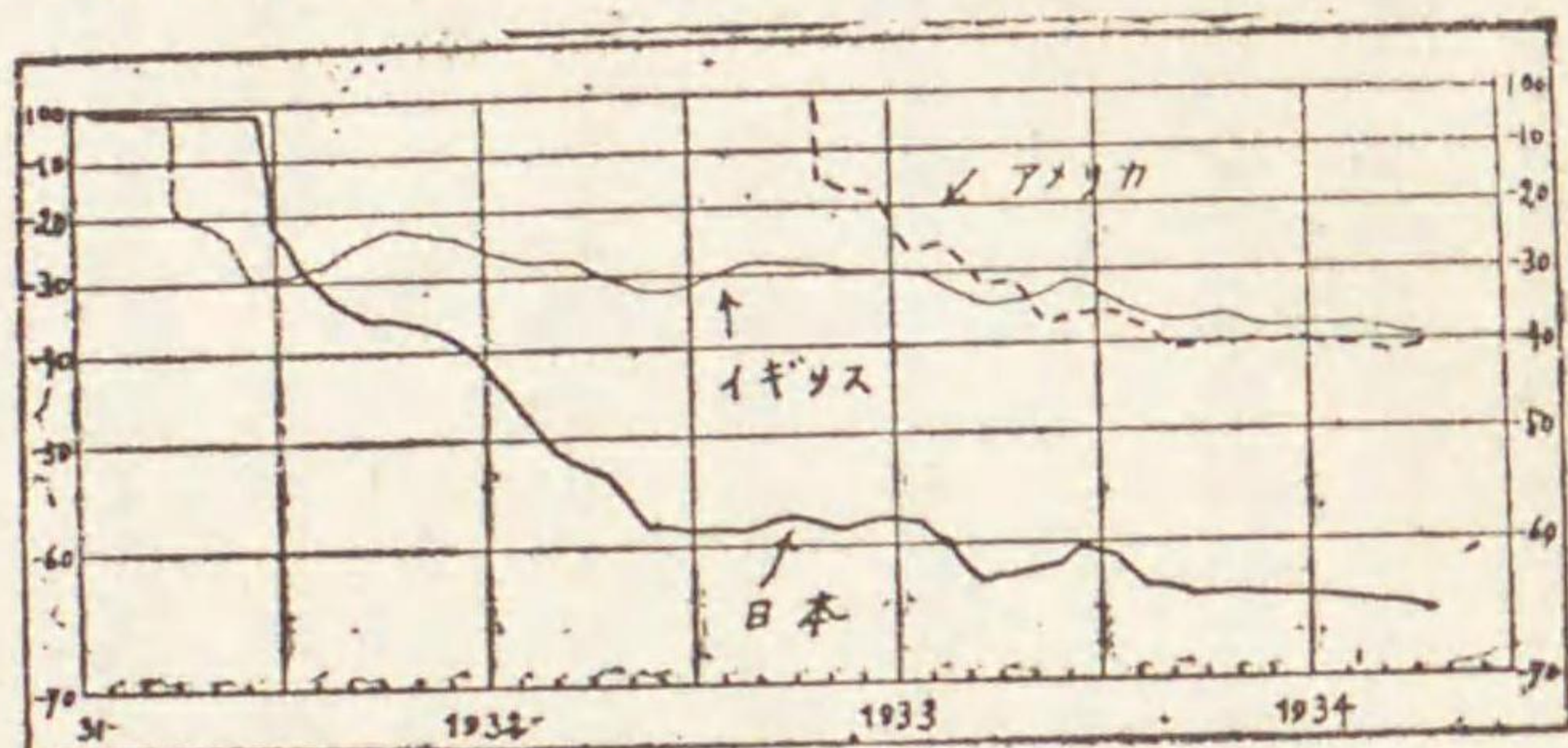
(八) 銀行組織の改造

國家は個々の銀行に對し直接の救濟策を講ずるだけでなく、また金融恐慌の特にひどかつた若干の國々では、進んでその銀行組織の改造に着手しなければならなかつた。この點でこゝに特筆すべきものはドイツとアメリカであらう。これに移るまへに姑く三年の金融恐慌と各國の銀行組織との關係を一瞥しておかう。

(イ) まづ、イギリスであるが、此國の銀行組織は少數の有力なる株式銀行とその健實な傳統的的政策のために最も危險尠いもの

と見られてゐるが、最近では工業投資も可成り殖えてきてゐる。だが、現金準備率も維持されその流動性も大きい。恐慌でやられたのは私銀行で可成りの痛手を蒙つた。

日、英、米の爲替下落率(各國通貨の金平價=100)





(ロ) 英帝國領でも大體に母國に型つてゐるため、ひどい恐慌に見舞はれながらも、銀行破産もなく——多く大銀行に合同された——本質的には、健全であり得た。銀行組織の改造として特記すべきことは、英領諸國における準備銀行設立の進行である。即ちニュー・ジールランドは準備銀行を設立し、カナダでは準備銀行設立案が通過するし、オーストラリアのコンモンウェルス銀行は、事實上中央銀行になり終へた。インドは一九三三年同じく準備銀行設立案の通過を見た。

(ハ) 北、ヨ、ロ、ツ、パ小獨立國は恐慌前にブームがなく外國の短期資金も集まつてゐなかつただけに、商業銀行もさした苦境に立たなかつた。たとへば、リ、ス、ア、ニ、アの如きは、可成りの預金引出しに會つたけれども、よくこれに抵抗した。現在、リ、ス、ア、ニ、アは爲替管理もやらずに金本位を維持してゐる。

(ニ) 最低の金融國なる金、本、位、國でも銀行組織はひどい壓迫を受け、ベルギー、フランス、スイスいづれも多大の國家的援助を必要とした。

(ホ) 一番悪かつたのは勿論問題の中、央、ヨ、ロ、ツ、パ諸國である。こゝでは銀行と産業が密接に結びついてゐるし、しかもそれが外國短期資金を通じて行はれてゐる。

就中、ドイツでは——オ、オ、ス、ト、リ、アも同様——銀行の損害が莫大なところから國家は信用組織の改造にまで取りかゝらねばならなかつた。まづ差當り、短資据置の協定をやると同時に、他方嚴重な爲替管理を斷行して外國短資の引上げに對處し、次いでナチス政府の天下となつて失業救済のため、大々的な公共事業計畫が信用の膨脹を要求するや、外貨支拂の問題が緊急化し、ライヒス・バンクの準備が逼迫しはじめた。そこで、三四年はじめには、ドイツの全信用體系をあげてライヒス・バンクに集中し、同行は國內信用狀勢にかぎらず、わづかの準備金を擁しながら、外國との金融上の取引をも統制することになつたのである。

(ヘ) 最後にアメリカであるが、銀行パニックスの發展を阻止するために先づ三一年十月七日「全國信用會社」これに代つて十二月八日「復興金融會社」の設立あり、明けて三二年二月には信用膨脹の目的をもつて、例のグラス・スチーガルの銀行法案が通過した。

次いで、十月には同會社の一分枝として「預金清算局」The Deposit Liquidation Boardが設けられ、復興金融會社による多數銀行の優先株の購入、諸種の形態の中期及び長期信用のための政府機關の新設となり、三四年二月には國際貿易促進の目的をもつて、三つの「輸出銀行」を設けるなど、政府の金融工作には並々ならぬものがあつた。その他、農業、土地及び商



品金融會社の新設があり、他方、この間、聯邦準備局と國家財政との結びつきを密接にするなど、政府による銀行組織への參與及びその統制はますます強化されてきたのである。

三四年一月に通過した例の「金準備法案」<sup>ゴールド・スタンダード・ビル</sup>は、政府、大藏省に金準備を保有せしめることになつてゐるが、これなどはもちろん右の方向をさらに一歩進めたものである。

### (九) 恐慌後における資本市場の特質

恐慌の進行につれて資本の發行は各國ともに著しい減少をみた。恐慌前、ブームを享樂してゐた國ほどひどく減つた。ことに三一年の金融恐慌によつて世界の金本位體系が崩壊しはじめたからは、恐慌の昂進と通貨不安から、わけて、金本位維持國において減少はひどかつた。三年には世界の新資本發行は極度の不振に陥つてしまつた。もつとも、三二年下期以來、世界經濟が恐慌から漸次恢復するにつれて、一連の國々では若干の發行増を認めることができるけれども、三四年下期になつて世界經濟が再び低迷状態に陥るとともに資本市場もまた萎縮しはじめた。しかし、この間に最近の世界經濟を特徴づける重要な諸要素のあらはれたことを見逃してはならない。恐慌後、とくに「恢復期」を通じて見られる世界資本市場の特質には次ぎの

如きものがある。

(イ) 資本の發行そのものゝ大いさが、恐慌期に嘗てなく激減したことは當然として、謂はゆる恢復期においても左した増加をみないこと。

この事は勿論、現在の世界經濟の恢復といふものが從來のやうな正常なプロセスを踏んできたものでなく、もつぱら人爲的景氣政策によつて齎らされたものであるだけに、未だ根柢には不安が巢喰つてゐることによる。(特に金ブロックのデフレーションと通貨不安)。

(ロ) したがつて、過剰貨幣資本は個々人の手に、金又は銀行券の形で退藏されるか或は銀行に短期預金の形で預けられるかされて一向に長期資本市場にあらはれて來ない。

(ハ) 新發行にしてもその内容をみると政府發行のみ多くして、民間の産業發行は相對的に益々ひどく減少し、兩者の位置はこの數年間に全く顛倒してしまつた。

(ニ) 國際的不安のため外國發行が殆んど停止し、今のところ、尙ほ、一向に恢復にむかひさうにも見えない。

(ホ) 經濟的國民主義のため國によつてその内容を異にし、とくに國際金融梗塞のため長期利率においてひどい違ひがあること。



以下、簡単にこれらの事項を説明してみよう。

(10) 資本發行の不振

まづ、恐慌及びその後における主要國の年々の資本發行高を表示すると次表のやうで、全體として、世界經濟の恢復期と云はれる三三年において皮肉にも資本發行は却つて最低位に墮ちてゐる。表には表はれてゐないが三四年に入つて殖えはしたが、下半期にはふたゝび頭打ちの状態にある。

主要國における資本發行 (各國通貨百萬單位)

イギリス (ポンド)	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三
債權	二八五・二	二七〇・八	一〇二・一	一八八・九	二四〇・八
内、公債	一三七・七	一三〇・四	七四・九	一七〇・二	二二二・一
株式	七五・四	一三六・一	四三・〇	一三六・五	一八〇・三
株	一四七・五	三七・九	二七・二	一八・七	二二・七
アメリカ (ドル)	一〇、一八三	七、〇三三	三、一一六	一、一九二	七・六
債權	四、〇九四	五、四七六	二、八〇五	一、一七三	五九六
内、公債	六、〇八九	一、五四五	三・一	二〇	一一〇
株式					

フランス (フラン)	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三
債權	二二、七二六	三〇、四九九	二八、六八	二六、七八〇	二五、九五七
内、公債	一四、三九三	二六、一一二	二六、五九〇	二五、四三五	二四、九九四
株式	三、八七六	五、〇九二	八、二四五	一四、五四七	一六、五二二
株	八、三三三	四、三七三	二、〇四八	一、三五六	九六三
ドイツ (マルク)	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三
債權	二、六八三	三、四八一	一、九八〇	九七四	一、五四
内、公債	一、六八五	二、九二六	一、三三八	八二四	一、四三三
株式	五二〇	三三九	二七	二七八	九九三
株	九七九	五五五	六三五	一五〇	九一
ベルギー (フラン)	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三
公債	二二、八七六	五、四四七	六、〇一九	五、二四九	三、〇一一
債權	九七五	一、八七二	三、三九〇	四、三三六	二、一一五
オランダ (ギルダー)	四四二	五三七	二二八	三三二	二六八
債權	二二九	五〇七	二〇八	三三〇	二六六
内、公債	五一	一八四	一六三	二八〇	二六一
株式	二二三	二元	一〇	一	二
日本 (圓)	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三
債權	一、七三二	一、八二二	二、五七〇	三、三七八	五、五七七
内、公債	七八	一、三二二	二、〇五七	二、七二九	
株式	一、一五三	七三二	一、七九八	五四〇	一、三二七



景氣恢復をみたイギリスをはじめ金本位離脱國において増加し、デフレ一點張りの金本位國では反對に引續き減少してゐる。三三年のアメリカの激増は例の同年實施された新證券法が禍ひしたのだと専ら云はれてゐるが、他方、財界の前途、なかんづく通貨不安が大いに作用してゐることは否めない。これらの間にあつて日本はひとり例外をなして、金再禁止以來激増をみせてゐる。

(一一) 政府發行の増加とその意義

さらに、注意すべきことは前表にもあるやうに、政府發行公債が最近數年間に益々重要な地位を占めてきたことだ。恐慌に襲はれて各國はいづれも老大な赤字公債を増發しなければならなかつたことは誰れしも知るところである。そして未だ今日に至るまでも、イギリスを除いて他の殆んど凡べての主要國が老大な赤字公債を發行しつゞけてゐる。資本救濟、農村及び失業救濟のために老大な非常時支出を各國とも必要としてゐるのだ。

この政府發行増に對して民間發行、わけて株式發行はひどく減退した。増加すべきはずの民間の確定利付證券發行までもが「恢復期」に、イギリスを除いて、一向に増加しないことも興

味ある事實だ。試みに二、三の國々について政府及び民間發行の比較をこゝろみると、

諸國における長期發行中、政府發行の占むる%

	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三
ベルギー	八	三四	五六	八二	七〇
ドイツ	一五	四	一	二九	六六
オランダ	一二	三四	七四	八〇	九七
スイス	五	六	三八	四四	六〇
アメリカ	二六	五一	四二	六七	七四

兩者の地位は最近全く顛倒して興味深い對照をなしてゐる。資本は、過剰の貨幣資本は産業資本に轉化して利潤をかせぐことができず、ますます多く國家財政に寄食して利子を喰んできつゝあるのだ。けだし、國民大衆にとつて租税によつて保證された公債を措いては、今のところ、安全且つ収益ある放資對象はないからだ。戦後、資本主義は漸次腐朽し、資本はやうやく寄生的生活をはじめてきたと云はれてゐるが、この傾向は最近ますます強まるのみだ。資本はますます公債に、即ち國家財政に寄宿しつゝあるのである。



### (111) 對外發行の梗概

最近における資本發行の内容について更に注意すべき特徴的事實は、その一般的減退の中にあつて、とくに對外發行が激減したことである。一ばん、國際的な、否、本來コスモポリタンのチャンピオンたる資本までが最近、國民主義の埒内におし込められてゐるのだ。資本發行の底であつた三三年には、對外發行は殆んど熄んでしまつたと云つても過言でない。事實、アメリカ、スイス、オランダにありては三三年には完全に停止し、三四年になつても一向に改まらない。云ふまでもなく、經濟不安からくる國際間の政治的社會的不安が禍してゐるのだ。又イギリスにしてもその發行の殆どが全部英領内の發行に限られてゐる。

#### 一九二九—一九三三年又ハ三四年上半期の對外發行 (各國通貨百萬單位)

イギリス (ポンド)	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三
英帝國	壹・二	六・〇	六・四	三・五	二九・二
外 國	四・三	二六・二	三五・七	九・一	〇・三
アメリカ (ドル)	一、三九	七五	一、〇〇九	二五四	二六

フランクス (フラン)	植 民 地	七三	四四	一、三三三	二、四九三	二、二五二	二、七六八
外 國	—	五七	二、六〇〇	四、一六一	一、三五六	一、四〇七	—
オランダ (ギルダー)	植 民 地	—	—	—	—	—	一〇四
外 國	二四	一〇六	二四一	三三	二三	—	—
ス イ ス (フラン)	九二	一一〇	三三五	一〇三	一四五	—	—

將來の通貨不安に加へて、租税、關稅、割當制、外貨支拂ひ等の諸問題が對外貸付を極度に危険ならしめてゐるのである。

他方、一九三三年は從來の國際債務關係の整調期ではあつた。だが、それは多く外國短資の減少による消極的調整であつて、長期にあつては、諸種の交渉はむしろ、調整の困難を思はしめるものがあつた。

### (112) 金の國際的移動

恐慌期には何といつても本當の貨幣、金キネが何よりも大切である。或る人はこの間の消息を、



牝鹿が谷間の清水を求めた様にたとへてゐるが、本當にさうである。恐慌期には通貨は、世界貨幣たり、真正正銘の貨幣たる金に轉身し世界の安全地帯を求めて移動する。同時に債權國は債務國に向つて切りにその債權の回収を強行する。かうした諸事情が競合して最近數年間、わけて恐慌期には金の世界的配分が狂ひ、謂はゆる金の偏在をひどくした。

戦後、世界金融界に進出してきたニューヨーク市場に世界の金が一ばん多く集まつたとして、恐慌期にはパリ市場に最も多く集まつた。云ふまでもなく、これらの市場がそれらの時期に一番安定してゐたからだ。恐慌期におけるフランスの金融的進出には、物凄いなものがあつた。ロンドン及びニューヨークを向ふに廻して世界金融界に活躍するに至つた。恐慌原因として金の偏在が指摘され、その責任をフランスが世界から問はれたこと、そしてフランスが辯明これ勤めたことは未だ吾々の記憶に新らしい。金の偏在は世界經濟恐慌現象の一つであつて、その原因では素よりない。が、恐慌を一層悪性のものとしたことは間違ひない。事實、金不足國では通貨は過度に收縮し、物價下落、信用硬化となり、金過剩國では、政策的な通貨膨脹抑壓も手傳つて、過剰金は徒らに死藏されるのみであつた。わけて最近の金ブロック諸國における恐慌の昂進からくる通貨不安は、ますます金の死藏へと趨らしめてゐるのである。

恐慌による金の變態的移動は金融恐慌に入つてから益々酷くなつたが、三四年一月末、アメリカの平價切下げによつてほど一段落をついたものゝやうである。金融恐慌勃發の三一年にはイギリスが大量の金流出をみ、明けて三二年には磅安定、弗不安と舞臺は變つて、アメリカが大量の金流出に見舞はれた。この間、日本、ドイツも引續き金流出をみ、これらの金はすべてフランスをはじめ金本位ブロックの諸國に流れ込んだのである。もつとも、三四年にはイギリスはその財界恢復の比較的堅實なることや、磅貨安定などのため漸次信用を恢復して今やふたたび嘗ての世界金融市場としての地位を挽回しつゝあるのである。引きかへて、恐慌期多量の流入をみたフランスは現在のデフレ進行、フラン貨不安のため最近却つて金の流出をみつゝある。同様のことは小規模ながら他の金本位國についても云へる。金本位國は恐慌に陥ること他の諸國よりも遅かつたが、恐慌からの恢復もおそく、現在なほ深刻な不況に苦しみ、通貨不安は徒らに昂じつゝあるのである。

## 主要國の金移動 (單位百萬金圓▲印出超)

日	本	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	三四年八月迄	三〇 三四年計
		▲二九・六	▲四一〇・六	▲二二・七	▲二〇・九	▲〇・〇	▲八四四・〇



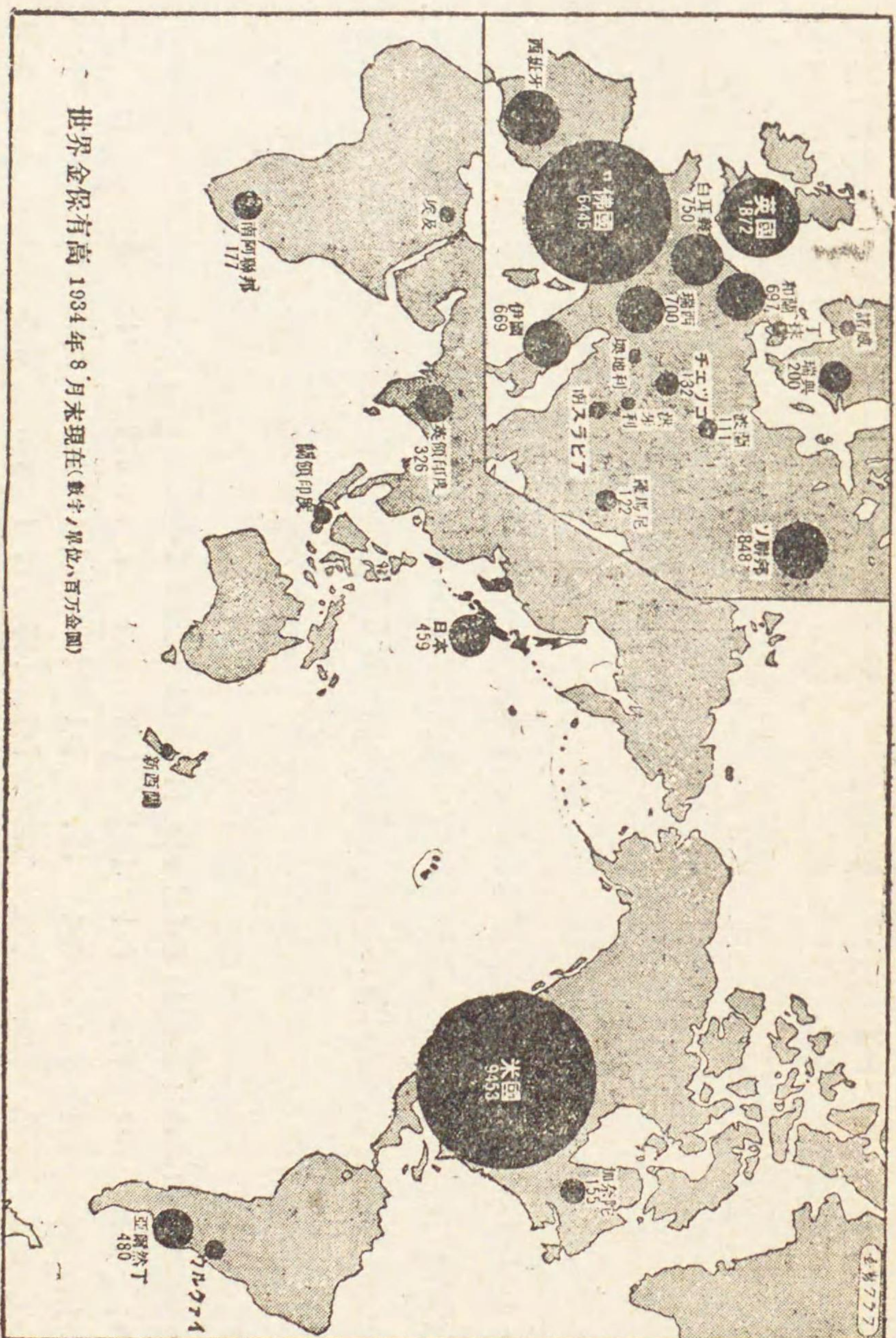
世界經濟の常識

二〇四

アメリカ	五六一・九	二九一・五	▲八九五・二	三四八・一	一、〇七七・一	六八七・二
イギリス	四七・五	▲二八八・三	一六九・七	一、三五九・〇	六九五・五	一九八三・四
フランス	九三・四	一、四六〇・九	一、六六一・五	▲四八九・七	▲四七〇・四	四、〇六五・一
ドイツ	▲二八・〇	▲四九七・五	▲六・八	▲二〇六・四	▲二三・〇	▲九一〇・七
オランダ	▲一五・四	三九八・四	二三三・九	▲一三五・四	▲一一〇・七	三六八・八
スイス	四四・五	四四七・〇	三四〇・六	▲八二・五	▲一〇七・七	六四一九
英印	一一五・六	▲二九二・二	▲三九二・六	▲二五二・八	▲二〇一・一	▲九三三・三

主要國政府及び中央銀行の金保有高 (單位舊平價百萬弗)

	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年
保有額	對世界合	計比率%	同上	同上	同上	同上
アメリカ	一、二九〇	二六・五	四、三三五	三八・七	四、〇五一	三五・八
フランス	六七八	一三・九	二、一〇〇	一九・二	二、六九九	三三・九
米佛計	一、九六八	四〇・五	六、三三五	五七・九	六、七五〇	五九・七
イギリス	一六四	三・三	七・八	六・五	五・八七	五・一
ドイツ	二七八	五・七	五・七	四・八	二・〇	一九二
イタリー	二六六	五・四	二七八	二・五	二・六	三〇七
ベルギー	四八	〇・九	一九〇	一・七	三五四	三・一
オランダ	六〇	一・二	一七一	一・五	三五六	三・一



世界金保有高 1934年8月末現在(數字、單位、百萬金圓)

第三篇 最近世界經濟の特質

二〇五



スイス	三三〇・六	二七	一・二	四三二	四〇	四七六	四〇	三八六	三二	三三六	二・七	
インド	二三二・五	二八	一・一	一六一	一四	一六一	一三	一六二	一三	一六二	一・三	
日本	六四一・三	四二	三・七	三三四	二〇	二二	一七	二二	一七	二二	一・七	
世界合計	四、八五六	一〇〇・〇	一〇、二六六	一〇〇・〇	一一、九三一	一〇〇・〇	一一、八七九	一〇〇・〇	一一、九八一	一〇〇・〇	一一、三三六	一〇〇・〇

(一四) 金の退藏

今度の世界經濟恐慌の悪性さは、金退藏のなかにも明瞭にあらはれてゐる。資本化するどころか、完全に流行程から身を退いて金は徒らに死藏されるのみだ。面白いことは、世界經濟界の恢復期とみられてゐる三三年において金の死藏は急増し、同年中の總額は三十億スイス法(五億六千萬ドル) 近くにも上つてゐる。

世界における金の退藏 (單位舊平價百萬弗)

年次	世界生産高 定額(上段の1割)	美術工業用生産推 定額(上段の1割)	印度及び支那 よりの流出金	貨幣用 金流出金	五十ヶ國貨幣用 金の前年比額	復活金(一) 伊懸金(十)
一九三〇年末	四二六・七	四一・六	×五〇・八	四二五・九	十六二〇・四	十一八四・五
一九三一年末	四四〇・五	四四・〇	×八八・八	四八四・五	十三七四・〇	一一一〇・〇
一九三三年末	四九一・五	四九・一	二三・五	六七三・九	十六〇六・一	一六七・八

× 支那よりの流出を含まず。

一九三三年末	四九四・九	四九・四	一五七・〇	六〇二・五	十四三・〇	一五九・五
一九三四年末	一一〇・〇	一一・〇	×四九・一	一五七・一	十二九・〇	一一七・九

三三年のはじめにはドル貨の前途不安から大量の金退藏が行はれ、三月にはルーヴエルトの大統領就任とともに個人持の金(金貨、金塊、金證券)の證券提出を命ずることになつたが他方、六月、國際經濟會議の決裂、十月以降にはさらにドイツの軍縮會議及び聯盟退、ドル貨引下げの懸念、フランスの豫算均衡問題にからまる政局不安等々の事情のため、年末において大量の金が退藏されるに至つたのである。

かくて三四年はじめには、世界の退藏金は約七十億スイス法(約十三億五千萬ドル)で、すなはち、世界金年産額の約二倍半に相當するものとみられる。世界經濟の「恢復」といふが、それは金本位離脱國(實質的な)に限つたわけで、金の多量保有國たる金ブロック諸國ではむしろ景氣はますます悪化するばかりだから、この不均衡が善い方向に是正されでもないかぎり、退藏金の還流は困難とみななければならぬ。



## 第八章 國際債務關係の調整

—殊に戰債賠償問題に就て—

## (一) 長期及中期債務の緊急處置

—ドイツのトランスファ・モラトリアム—

世界の債務國は恐慌に打ちひしがれて、勿論その老大な外債の元利拂を忠實に履行することはできなかつた。多く、モラトリアムとか低利借替へに訴へざるを得なかつた。ドイツは先に三一年の金融恐慌後(八月)外國短資については据置協定を結んだが——その後三度改更された——長期債務については、三三年六月、皮肉にもロンドン世界經濟會議の開催中、七月一日以降トランスファ・モラトリアムを實施する旨を宣言して、外國の債權者たちを驚かした。もつとも、これはトランスファの停止であつて、債務履行そのものを停止したわけではない。債務者は期限到來とともに「外債換算金庫」にマルクを以て拂込みはするのであるが、たゞそれ

を實際トランスファするのを停止するのである。

これではドーズ債の元利拂及びヤング債の利拂は除外され、その他の利子及び配當も同年下期拂込額の五〇%をトランスファし、残餘は換算金庫券たるスクリツプを交付すると云つた條件づきのものであつた。三四年上期にはさらに三〇%に引下げられた。

四月下旬、トランスファ問題の根本的解決のため長期債權會議を開いたが、折合がつかず、結局、六月十日、ライヒス・バンク理事會は、ドーズ及びヤング公債の元利拂をもふくめ、中期一切の外國債務支拂に關するトランスファの停止を行ふ旨決定したのである。

ところが、債權者側とくにイギリスの強硬な反對に會ひ、結局英に對し兩公債の利拂を約束し、その他の債務についても若干の讓歩的條件を加へることになつた。ドーズ及びヤング債の利拂は、さらに、佛、スイス、和、スエーデンについても、結局イギリスと同様の結果になつた。

ドイツ以外の債務國もその中長期について、端的にモラを宣言した。ルーマニアは三三年八月外債利拂のモラを宣言し、結局、三三年九月——三四年三月の六ヶ月に所定支拂額の二五%を支拂ふことゝなつた。其他、ブルガリア、ギリシヤでも同様のことが行はれ、これと同時に



三三年にはドイツ同様金融恐慌直後に締結された短期債務の据置協定が改更され、他面、その支拂ひも行はれたのである。要するに、世界中長期對外債務はその調整どころか、むしろ、抜きさしならぬ状態に陥り、緊急處置によつてその場を糊塗して行かねばならぬ有様なのだ。

### (二) 短期債務の整理

長期の對外債務調整が全般的に暗礁に乗上げてゐるのに對して、短期債の方は、最近數年間におそろしく減少したが、今尙、整理期を脱しないやうである。國際決済銀行の調査によると歐米における短期債は次ぎのやうに年々急減してゐる。

#### 歐米諸國の短期債 (單位十億スイス法)

一九三〇年末	七〇	一九三二年末	三九
一九三一年末	四五	一九三三年末	三二

これは主として短資の引上げと、他方、主要國通貨が金に對して減價した結果である。その他、長期債への借替へも短期債激減の原因となつてゐる。

國際聯盟の「概観」(一九三四年)は、なほ、三三年の國際信用界の改善——もちろん消極的

な改善として次ぎの諸事實を掲げてゐる。

- (イ) ロシアをはじめその他諸國において、同じく短期對外債務が著しく減少したこと。
- (ロ) 農業國がその在外資金を著しく殖やしたこと——例へば國際決済銀行の評價によると三三年末における南アフリカ、オーストラリア、インド、エヂプト及びスカンデナヴィア諸國の在ロンドン資金は一億二千萬スターリングで、恐慌前、嘗てみない多額に上つてゐた。しかし、これは謂ゆるスターリング・ブロック圏内の出來事であることを注意せねばならないであらう。

(ハ) 最後に今一つ、南米諸國、わけてアルゼンチン及びブラジルにおいて罐詰にされてゐた短期債が解放されたこと。一九三三年十一月までに、米、佛、伊、スイス、和、西、白等と協定の結果、二千二百萬ペソスが解放されたのである。

同じ「概観」は國際資本市場のむすびとして凡そ次ぎのやうに言つてゐる。

(イ) 國際長期債の方は混亂不確定の状態にあるに反して、短期債の方では幾多の國々において減少し、凍結してゐたものも融解された。

(ロ) 債務及び債權者双方の努力を讓歩とによつて、それに若干の經濟界の恢復も手傳つて



幾多の農産物輸出國、例へば英領、南米、スカンデナヴィア諸國の財政状態を改善せしめた。

(ハ) 最後に國際決済銀行の年報から言葉をかりて、債務國側の改善は漸次進捗してゐるのだから、そのうちに、國際貸借の開始期も來るべく、そして、貿易を促進し、未済の金貸借關係を一層調整して呉れるであらう、と。

以上列擧のうち、世界農業界の立直りとその對外債務の調整はとくに世間で重要視され、ベルリン景氣研究所の三四年第三・四半期報も就中この點を世界經濟界の現在の唯一の好材料とみてゐるが、しかし、これにはさした期待をかけるわけには行くまい。といふのは、現在のところ、

(イ) これら諸國の財政状態は漸次改善しつつあると云ふが、それは未だ工業諸國に對する需要増となつてはあらはれるに至つてゐない。

(ロ) 又、農業國の立直りと云つても、それは主としてスターリング・ブロック圏内にかぎられてゐること。このブロック内の農業諸國はたしかに、ブロック結成から貿易上獲るところがあつた。

(ハ) さらに問題なのは、農産物輸入國、とくにヨーロッパの諸國が食糧自給、農業保護の

名の下に自ら生産を殖すとともに農産物輸入の抑制を益々強めつつあることだ。

(ニ) 最後に、最近の世界農業界の立直りには、三四年における早魃其他の謂はゞ一時的偶然的な事情がはたらいてゐることを忘れてはならない。

### (三) 戦債及び賠償問題の發展——ドイツの支拂つた賠償金

戦債及び賠償、就中、賠償の問題こそは世界戦争が残した最大の問題と云へる。それは戦後世界經濟の悪性の痛であつた。或る人はこれを以て戦後の安定期における諸國の金本位復歸と並べて二九年度世界經濟恐慌の二大原因の一つとみてゐるし、又ドイツ經濟相シャハトの世界經濟論によれば、これこそが唯一とまでも云つて好いドイツ經濟恐慌及び世界經濟恐慌の原因となつてゐる。

とも角として、この問題が戦前世界經濟の不均衡の當然の結果とは言へ、これがまた戦後世界經濟の不均衡を層一層ひどくし、延いて世界恐慌の一つの原因となつたことは否めない。わけて當のドイツ經濟の戦後における發展に對して如何に重々しい壓迫となり、ドイツ經濟恐慌をして悪性のものたらしめたかは、後段いさゝか述べる通りである。



いまは賠償問題發展のいきさつについて立入つて述べる場合でない。周知のとほり、賠償の發展史はこれを大體四期に分けることができる。

- 第一期 ドーズ案以前 (戦後——一九二四年)
- 第二期 ドーズ案時代 (一九二四、八——一九二九・八)
- 第三期 ヤング案による支拂時代 (一九二九・九——)
- 第四期 フーヴァー・モラトリアム以後 (一九三一・七——)

もろくの案によつてドイツが幾何の賠償金を課せられたかは問題でない。この間に事實上どれだけの支拂をなしたかである。

第一期ではその支拂實額は分明でない。賠償委員會の報告は一九二二年までに一切合切で五十一億金マルクと云ふし、これに對し當のドイツは二百億金マルクと主張してゐる。

精確な計算のできるのはドーズ案以後である。そして、ドーズ案以後、フーヴァー・モラトリアムに至るまでの累計百〇四億百萬マルクに上つてゐるのである。ドイツはこの期間極めて忠實に賠償金をば支拂つたのである。

ところが、その後は、例のフーヴァー・モラトリアムによつて實際上支拂は停止され、次いで

ローザンヌ會議によつて賠償問題そのものも一應解消するに至つたのである。

ドイツの賠償金支拂額 (一九二四——三一年、百萬金マルク)

年	金	計	一九二四	一九二五	一九二六	一九二七	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一
フランス	四四・六	五八四・六	七四七・八	八八七・九	一、二九〇・二	四二八・八	九〇〇・七	二〇九・六		
イギリス帝國	一九一・〇	二四〇・七	三〇九・九	三六九・六	五四一・八	五三・一	三六六・八	九〇・五		
イタリア	六六・八	八六・一	九七・八	二一八・七	一八五・一	四三・五	一五・〇	四七・七		
ベルギー	一一五・九	一〇五・三	七六・一	八六・八	二八・八	七〇・七	九八・二	二五・九		
ユーゴスラヴィア	三三・四	四三・一	四八・九	五九・四	九〇・一	七三・一	七九・四	一九・八		
合衆國	一五・四	一九・八	八〇・〇	八五・三	一〇〇・〇	六五・九	六六・三	一六・五		
ルーマニア	七・五	九・七	一二・三	一四・九	一〇・三	—	一〇・〇	三・〇		
日本	五・〇	六・四	八・三	一〇・一	一五・二	一三・二	一三・二	三・二		
ポルトガル	五・〇	六・四	八・二	一〇・〇	一五・一	六・〇	一三・二	三・三		
ギリシヤ	二・七	三・四	四・三	五・三	八・〇	—	三・六	一・七		
ポーランド	〇・一	〇・二	〇・二	〇・三	〇・七	〇・五	〇・五	〇・一		
年	金	計	九三・〇	一一、二七・八	一、四八・七	一、六五・六	二、四〇・六	七四二・八	一、七〇七・九	四三二・二

そこで、ドイツがこれまで支拂つた賠償金總額は、第一期のを賠償委員會の報告通り五十億マルクとすれば、第二及び第三、四期の分をこれに合せて合計百五十五億金マルクとなる。



因に昨年三月における在獨米國商業會議所總會における演説において、時のライヒス・バンク總裁シヤハトは「…賠償債務の既済額百五十億ライヒス・マルク云々」と述べてゐる。

(四) ドイツはどうして支拂つたか？

ドイツはこのやうな巨額の賠償金はどうして支拂つたか？ それは結局、外國資本を借入れ合理化政策を基調としてこれを運営することによつてであつた。周知のとほり、彼の八億マルクのドーゾ貸付に始まる外國資本の借入れによつてドイツ經濟は恢復の緒についた。

ところで、一國が年に十億、二十億マルクの無償支拂を正常に續けて行くには貿易差額（又は正常の貿易外收支）にそれだけの受取勘定がなければならぬ。ところが、ドイツの商品貿易は一九二四年以降二九年まで引續き支拂超過であつた。この間、商品貿易の支拂超過だけでもすでに六十三億マルクにのぼる。

ドイツの外債がこの期間におそろしく膨脹しなければならなかつたのは、けだし、當然である。即ち一九二四年から三一年の八ケ年に、實に百八十七億マルクの増加となつてゐる。この間の債務支拂額百〇四億を超過すること實にはるかである。

	一九二四年	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	計	一九三二年	一九三三年
輸出	七・九	九・五	一〇・七	一一・一	一二・六	一三・六	一二・一	七七・五	四・八	四・五
輸入	九・七	一二・〇	九・九	一四・一	一三・九	一三・六	一〇・六	八三・八	三・八	二・五
商品貿易決済尻	一・八	二・五	一・〇	一・三	一・三	一・〇	一・一	一・五	一・三	一・〇
發券銀行所有の金及爲替の運動	一・三	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇
賠償支拂	一・〇	一・〇	一・一	一・一	一・二	一・二	一・一	一・一	一・一	一・一
サービス（運賃等）	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇
利子	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇
資本運動（長期）	一・〇	一・一	一・一	一・一	一・一	一・一	一・一	一・一	一・一	一・一
〃（短期）	一・一	一・三	一・四	一・七	一・七	一・六	一・一	一・一	一・一	一・一
其他の資本運動	一・四	一・七	一・九	一・四	一・二	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇
	一・九	二・一	二・六	三・九	四・三	二・七	一・七	一・二	一・二	一・二

賠償金支拂に相當する以上、さらに國內産業の合理化資金、或は社會政策資金として外資の流入の必要をみたからである。賠償金はなるほど「實に忠實に」支拂はれはしたが、それは、右の始末で結局、「見せかけの支拂」に過ぎなかつたのである。

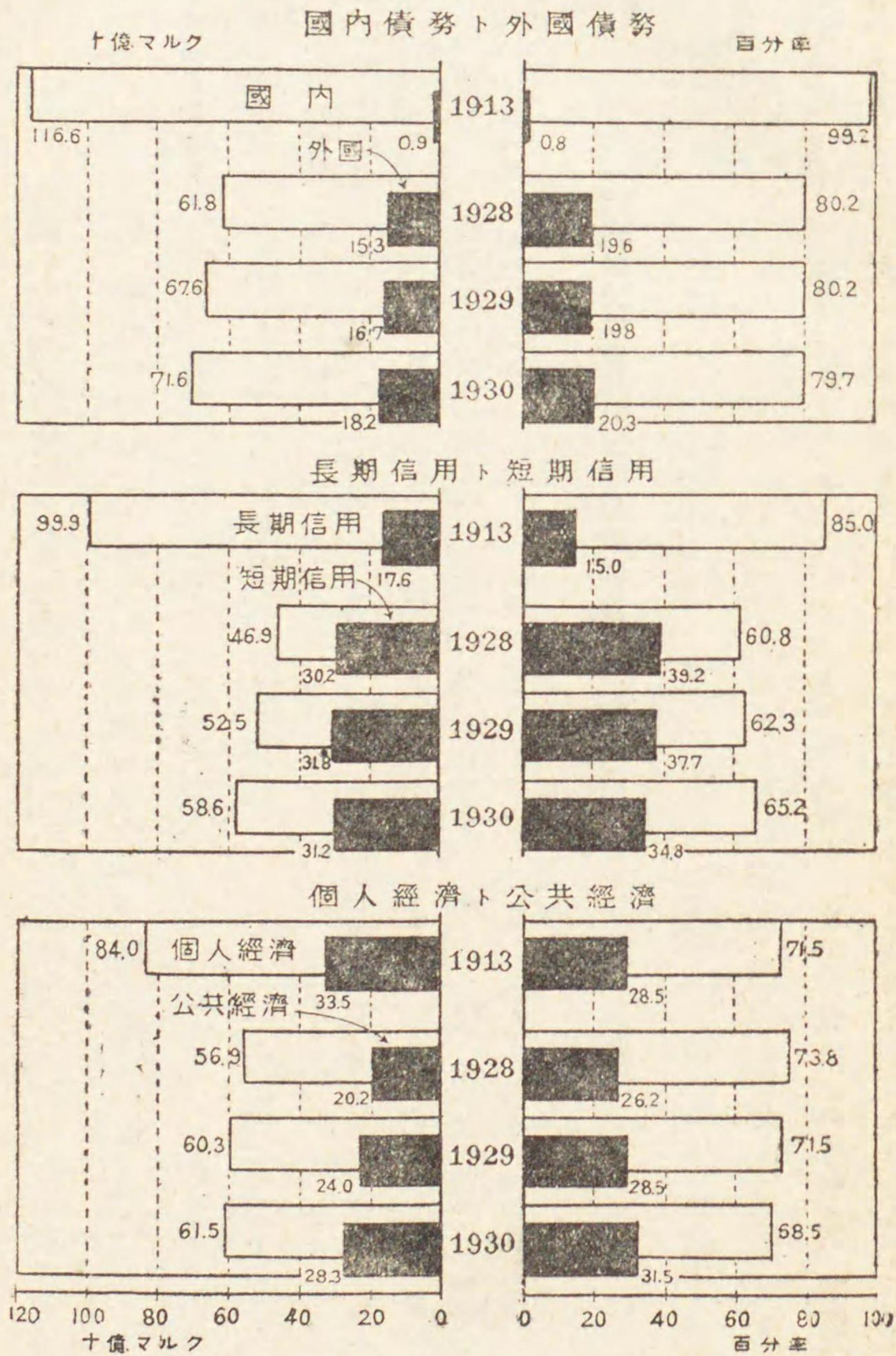


さらに、悪いことに、ドイツへ流入した資本は次第に長期から短期に變りつゝあつた。この短期資本をもつて、ドイツは長期資本の用に充つるの憂き目をみねばならなかつたのである。ウヴァール街の投資ブームはこのため、ドイツの金融市場を著しく逼迫せしめ、次いで三一年のドイツ金融恐慌の發端をつくるに至つたのである。

かくの如き巨額の債務の堆積は、獨逸の年々の金利の支拂ひ及び元金償却高を尨大な高さに驅り立てる。獨逸は長期資本の元利支拂ひのみで、一九三二年には八億千九百萬マルクを、一九三三年度には七億三千八百萬マルクを必要とした。のみならず、一九三二年度は短期資本總額の一〇%、即ち約十二億マルクを償却し、更にその金利を支拂はねばならぬといつた状態にあつたのである。

ドイツが賠償金以外にかくの如き巨額の債務を負擔してゐることは、ドイツ産業にとつては正しく大きなハンディキャップに違ひない。このドイツ經濟の負擔が結局、合理化を通じ、謂ゆる飢餓輸出となつて労働者階級に轉嫁されたことは云ふまでもない。戦争によるドイツ植民地の喪失は事情を一層わるいものにした。ヴェルサイユ條約の破棄、賠償金の棒引き、軍備の平等、大ドイツ主義等々をスローガンとしたナチスが遂に政權を獲得するに至つたのも亦當然

### 獨逸全債務における内譯





獨逸への長期外國貸付金の地理的分布 (百萬ライヒ) (一九三一年七月)

合衆國	イギリス	フランス	イタリア	オランダ	ベルギー	デンマーク	スウェーデン	その他	計	%
八七五	四九〇	一七四	一三六	一五二	四七五	三二	四六	一、三九九	二、五二	
八六〇	二二〇	二六六	五三	五三〇	—	—	—	一〇、一九九	二〇、一	
一、〇七三	四八	一一五	一一四	三	—	—	—	一、三八五	一四、五	
一八八	六	三〇	八	四	—	—	—	二五〇	二、六	
二、六九	三四六	五九	二〇一	一〇八	—	—	—	六九	三、五九二	
五、二六五	一、一〇〇	一、一七四	五二	七九七	—	—	—	二五	九、五五	
五五・二	一一・五	一一・三	五・四	八・三	〇・五	〇・五	一・三	一〇〇・〇	一〇〇・〇	

獨逸に於ける外國短期信用總額 (一九三一年七月、現在)

債權國名	衆國	イギリス	フランス	イタリア	オランダ	ベルギー	スウェーデン	その他	計	
銀行より銀行へ	一七二	一〇八	二七九	一〇	四五六	六二	三六	八三	三六	
銀行より商工業へ	三九	五〇六	五〇	二	七九三	五〇七	—	八	三三	
銀行より公共團體へ	二六	五	二四	—	一八	六三	—	—	二六	
銀行よりライヒ	二二〇	二	五	—	—	—	—	—	二二〇	
銀行より金	四九一	三八	一六三	四三	五八七	三三	—	—	一、〇九	
銀行より商工業へ	二〇一	三八	二八	三	一八九	三五	—	—	三六	
銀行より銀行へ	二二	二二	七	五	二四	二	—	—	二二	
銀行より外國債権者の其他の獨逸債務者への貸付	三、一四三	二、〇四	六五	一〇二	二、〇六九	一、八七	七	一九五	二、〇五	九、〇九

と云へよう。

(五) フーヴァ・モラトリアムからローザンヌ會議へ

賠償支拂はつまり、賠償金はドイツ資本主義の内部關係に對し、一つの大きな攪亂的作用を働らいたわけだが、これは又國際的にもさうであつた。程度の大小は問はないとして。一九三一年六月のフーヴァ・モラトリアム(一九三一年七月一月以後一ケ年の猶餘)の宣言から、その期間一ケ年を過ぎて、三二年六月、ローザンヌ會議となつたのも、そのためである。世界經濟恐慌、就中、金融恐慌は、戦後世界經濟の痛たる賠償問題に荒療治を加へて一應これを解消



せしめることになつたのである。周知の通り、フーヴァ・モラトリアムにせよ、ローザンヌ會議にせよ、諸債權國の利害衝突をみたが、結局、ローザンヌ會議によつて、ドイツは賠償金の代りにヨーロッパ復興資金の名目で一括して三十億マルクを公債で提供すればよいことになつたのである。これをヤング案による賠償總額千七百七億マルク、五十八ヶ年賦、其現在價格見積り三百六十億マルクに比べると、わづか四十分の一にしか當らない。のみならず、三ヶ年のモラトリアム附であり、且つ、國際信用恢復せずして規定の賣出價格をもつて公債を發行しえない場合には、條約批准後十五ヶ年を期間として、公債發行を廢棄することになつてゐるのである。けれども、この協定は關係諸國（アメリカは加つてゐない）の批准を必要とすることになつてゐる。これは併し、戰債問題が何とか型がつけられない限りむづかしいことだ。けだし、戰債問題は賠償問題と密接に結びついてゐる。兩問題の分離、不分離は利害關係者の間で八釜しく問題になつてきてゐるが、それは結局、自己の利害に基いてのことだ。主張はともかく、事實として、對米戰債々務國はドイツから受取る賠償金に依てその戰債を支拂ふとすれば、賠償金の解消は、延いて戰債支拂をして困難ならしめることは明かだ。戰債のみに就ても、ヨーロッパの列強は一方に二百億マルクに上る回收不能の債權をもち乍ら、他方、アメリカに

聯合國債權債務 (一九四四年二月末現在、百萬マルク)

債務國	權 債 國			合計
	アメリカ一九二四年二月五日	イギリス一九二五年三月三日	フランス一九二四年六月三日	
フランス	一七、三六・一	一三、八〇・〇	—	三〇、一七六・一
ロシヤ	一、〇五五・三	一五、四五八・七	五、二七九・八	二一、八九〇・〇
イタリ	八、八〇四・七	一一、九〇〇・一	二、八三・七	二〇、九八八・五
イギリス	一九、二四・七	—	—	一九、二四・七
ペルギー	一、九八〇・七	一八三・九	—	四、六四七・一
ユーゴスラヴィ	二六九・三	六六三・五	一、四〇八・二	二、三四一・〇
ルーマニヤ	一九一・五	六〇三・一	九六・一	一、八三三・〇
ポーランド	七四九・六	一〇一・二	七七七・〇	一、六八八・六
チエコスロバキ	四八五・〇	二六・八	四三九・二	一、〇九六・六
ギリシヤ	七二・四	四八五・四	四三五・四	九三三・〇
オーストリア	一二五・二	三三・七	二六八・九	六三五・八
ポルトガル	—	四四〇・一	七・三	四四七・四
エストニヤ	七三・四	五・一	二・八	八一三
フィンランド	三七・五	—	—	三七・五
イタリ	—	—	—	一一一三



世界經濟の常識

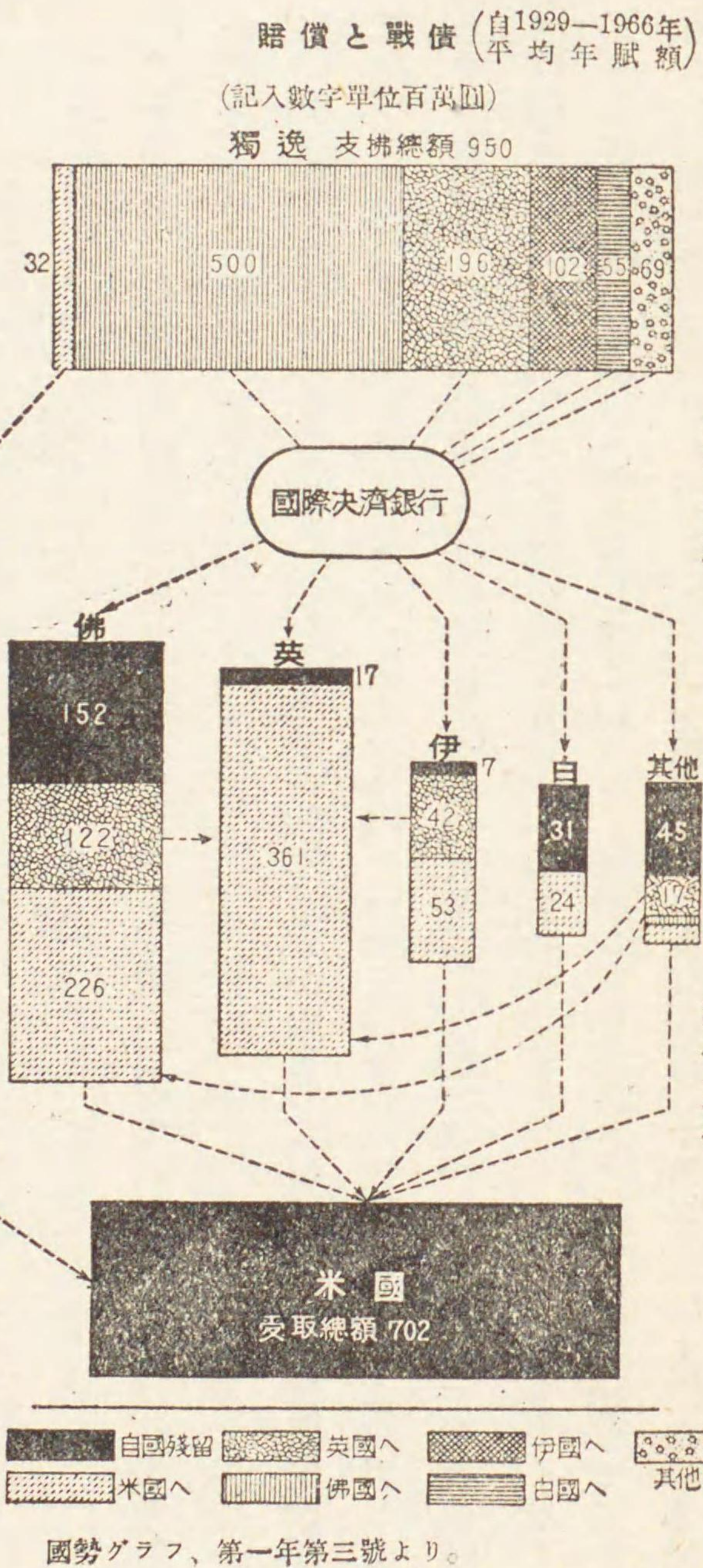
ラトビヤ	二六・四	二・七	七・三	二二四
リトアニア	二五・二	〇・三	一・九	二八・四
ハンガリー	八・二	二・四	〇・六	一一・二
計	五〇、四八・八	四三、九二・六	二二、二五・八	三五八・一
英領植民地	—	二、六七・八	—	二、六五・九
アルメニア	六三・四	一八・五	—	八〇・九
白領コング	—	七二・五	—	七二・五
ニクアラガ	〇・六	—	—	〇・六
リベリヤ	〇・一	—	—	〇・一
海外合計	六三・一	二、七四・八	—	二、八〇・〇
總計	五〇、五九・九	四五、六五・五	二二、二五・八	三五八・一
受取超過	十五、五四・九	—	—	—
支拂超過	—	—	—	—
支拂超過	—	—	—	—

1925, Heft 16 "Wirtschaft und Statistik"

對しては五百億マルク、即ち百億ドルの債務を辨濟せねばならぬ立場にあるのである。

かく、戦債と賠償とは事實上からみ合ふし、戦債は戦債でその間債権國と債務國とのあひだ

が錯雜して、正に網の目のやうな國際貸借關係を現はすに至つたのである。



このやうに紛糾した事態が簡単に解決されなかつたことはむしろ自然であらう。ローザンヌ會議の後に、戦債問題について、幾たびか債権國と債務國とのあひだに交渉が無益に試みられたか、こゝにその一々の場合について語る必要はなからう。



## 第九章 最近の國際物價

## (一) 恐慌前における不安の要素

世界戦争後、諸國の卸賣物價の動きは一律性を失ひ、國によつて區々となつた。戦争中、主要國のすべてが金本位を投げ出したせゐでもあるが、本當の原因はもつと深い經濟的構造の變化の中にあつた。それは、一九二五年以後、世界の通貨が安定してから、物價の國際的調整が試みられても、その効果があらはれずして、つひに一九二九年の恐慌を迎へたことに徴してもあきらかである。戦後世界の物價政策は、戦争中に暴騰した物價水準を如何にして戦前の水準まで引き下げると云ふことであつた。その第一條件は何よりも金本位への復歸であつた。二五年以後、諸國は相繼いで金本位に還つた。そして謂ゆる合理化により生産費を切下げることによつて物價の騰勢を抑へ、むしろそれを引き下げつゝ謂ゆる「相對的安定」——合理化景氣を享樂することに成功したのである。

事實、一九二五年以後、世界の卸賣物價水準は大體として落勢をみせた。しかし、通貨が堅實な世界的均衡を恢復せず、したがつて、物價變動の足並が揃はないうちに、恐慌に見舞はれてしまつた。この國際的不均衡に加へて、一見安定をみせてゐた國內物價の構造にも不均衡が隠されてゐたのである。世界經濟の「相對的安定」の一面をなす卸賣物價のこの相對的安定は事實一價格機構内の缺陷を隠蔽せるものであつて、それらの缺陷は少くとも一部分は一九二九年後起れる物價下落の峻烈さの原因となすべきものである。」〔概観「一九三一—三二年」〕

かうした、世界及び國內物價の根本的不調整に加へて、恐慌前を特徴づける世界的な信用インフレによるブームがあつたのである。この信用インフレは證券市場において特に目立つたけれども、他方、アメリカなどにおける消費者信用——就中、割賦販賣——の未曾有の膨脹もあつて耐久的消費財生産を促し、延いて生産活動一般の隆盛を惹起したが、重要なことは、これは結局、消費者の未來の購買力を先取りすることに終つたと云ふことである。生産設備の擴張と同時に、その反面消費者の未來の購買力の減少があつたわけだ。これは、一九二九年度の恐慌勃發を幾分延ばすと同時に、その深刻性を増さしむるものとなつたのである。この購買力の恐るべき破壊は、特に消費財價格の暴落となつて、恐慌期における物價の動きに對して全く新



しい、従來の恐慌期とは正反對の現象を生むに至つた有力な原因となつてゐるのである。(後段参照)

### (一) 恐慌後における物價の諸特質

以下、恐慌期及び「恢復期」における物價の動きをみるに先立つて、これらの期間にみられる特徴的な諸現象について、豫め注意しておくのも面白いと思はれる。次ぎの諸特質がみられる――

(イ) 二九年の恐慌前すでに世界の農業債務國では、卸賣物價の落勢は可成りに強まつてゐた。オーストラリア、アルゼンチン、蘭印、印度において殊にひどかつた。當時、世界の農業はすでに生産過剰に陥つてゐたことを想起すべきだ。

(ロ) が、農産物、延いて原料品の下落は本格的恐慌に入るとともに益々劇しくなり、一般物價水準の未曾有の激落の中にあつて、農産物の慘落は殊の外目立つてみえた。

(ハ) かうした事情は延いて、生産財及び消費財の價格下落に反映し、就中、消費財價格は生産財價格よりも一層ひどい下落をみたのである。従來の恐慌期における現象とは正反對の現象である。

象である。

(ニ) 恐慌對策として採られた諸國の金本位停止は國際通貨金融、延いて世界物價の動きを混亂せしめると同時に、他方、諸國の國民主義的貿易政策並に國內産業保護政策は、各自國市場をますます世界市場から隔離孤立化せしめることによつて、層一層と世界における物價の動きを攪亂してしまつた。

(ホ) 金本位を離脱した國々では多かれ尠かれ物價は名目上、騰勢に向つたが、それでも爲替下落率を考慮して金物價に換算してゐると、依然として低落乃至保合の傾向にある。金本國ではもちろん下落する一方だ。又、離脱國における名目的な騰貴にしても、また恐慌前の水準には遙かに遠い點において早くも停頓してゐる。

(ヘ) なかんづく、工業國にして自國農業の保護のため、食糧品の自給政策をとりつつある結果、食糧品價格においてその攪亂の度は一番ひどい。

(ト) 即ち、かうした事情は國內物價を世界市場價格以上にひどく吊上げると同時に、他方輸入品價格をして國內品以上に又吊上げることになるのである。

(チ) かゝる方策によつて工業國における農産物は激騰さへしたものとさへあつて、恐慌期に



おける生産財と消費財の價格低落差を漸次狭めつゝあるが、

(リ) 他方、農業國では必ずしも然らず、諸國の農産物輸入制限によつてその騰勢を壓へられてゐるし、又、前項の工業國における農産物騰貴にしたところが、實質的購買力の増加に基くものではないから、農工價格シエレが狭くなつてきたからと云つて必ずしも、樂觀すべき事柄ではない。おまけに最近の農産物騰貴には例の早魃が非常にはたらいてゐる。

(三) 諸國における物價水準の動き

一九二九年のニューヨーク取引所の崩壊以前、すでに目立つた下落をみつゝあつた農業債務國——アルゼンチン、蘭印、印度等の一般物價水準は取引所の崩壊をきつかけとして激烈となり、三〇年に入るや、これら諸國では逼迫状態の明白な兆があらはれ、つひに、オーストラリア及びアルゼンチンでは金本位を餘儀なくされた。

三一年に入つても世界的な物價下落は止まず、この年の終らないうちに、イギリス、印度及び日本は金本位を離脱し、續く三二年には多くの國々が同じ途を辿つた。

このため、世界の物價は、生産界の立直りとともに、三二年以上期に底をついて、大勢として

恢復へ向つたが、他方、金本位國では、中には國內政策のために漸騰に向ひつゝあるものもな

いではないが、多くは、爲替下落國における金物價下落の傾向にひきづられて、依然として下落乃至低迷の状態にあるのである。

物價の動きは素より國々によつて非常に區々であるが、今、主要國の物價が落ち込んだ最底

の時期とその後三四年四月までにおける恢復の度合を表示すると次ぎのやうである。

一九三一年一月	一九三二年六月	一九三三年一月	一九三四年四月までの恢復率(%)
オーストリア 六	日 本 二一	オーストリア 九	オランダ 一〇
デンマーク 一七	南 米 二〇	イギリス 六	イギリス 六
ノールウェー 五	ドイ ツ 五	フランス 八	スエーデン 八
フィンランド 一三	アメリカ 二三	ハンガリー 七	ハンガリー 七
	カナダ 一二		ベルギー 一
	オーストリア 一一		支那 一
	インド 九		フランス 一
			インド支那 一
			イタリー 一
			蘭 印 一
			ポーランド 一
			スイス 一

—依然として下落しつゝある國々—



三四年には金離脱國における騰勢も削げて米、獨をのぞく主要國は低迷してゐるが、就中、日本は前年にくらべてむしろ下落の傾向をさへみせてゐるのである。(左表参照)

各年三月における諸國の卸賣物價指數 (一九二九年三月—一〇〇)

	一九三〇年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	*三四年金物價
日本	八六・六	七〇・〇	七〇・一	七六・四	二八・〇
イギリス	八八・七	七五・六	七四・六	六九・六	二七・六
アメリカ	九三・九	九一・一	六八・七	六三・六	三三・三
ドイツ	九〇・五	八二・六	七二・五	六五・三	六八・七
フランス	八五・五	八二・五	六八・〇	五九・七	六〇・三
スイス	九二・四	八〇・一	六九・六	六三・五	六四・一
ポーランド	八八・九	七七・八	六八・九	六〇・六	五八・一
ベルギー	八九・一	七五・九	六三・一	五八・〇	五五・〇
イタリア	八七・四	七三・三	六四・五	五七・五	五三・五
オランダ	八三・五	七〇・一	五四・九	四八・二	五三・〇

\*基準同じ

即ち、右表中、金本位國では日本のみが三三年三月から三四年三月までに、わづかではある

が、一%の下落をみせてゐる。金本位國ではポーランドの四%、イタリアの四%、ベルギーの五%、ハンガリーの一〇%と大勢的に下落してゐる中に、フランスの一%、スイスの一%、オランダの一〇%が例外的に上昇してゐる。オランダの上昇は輸入價格の上昇による。

(四) 原料品、就中、農産物價格の暴落とその恢復

恐慌期(一九二九—三二年上期)を通じて原料品價格はおそろしく下落した。農産原料が殊に惨落したためだ。石炭、石油、鐵鋼等の鑛産原料はその統制の容易なため、價格の下落をみはしたが、その程度は割合に小さく、且つ、各國工業生産の恢復によつて、爾來顯著な騰勢をみせてきた。

一九二九年一月—一九三二年一月に至る卸賣價格指數の低落率

	原料品%	製品%
カナダ	三八	二二
イタリ	三一	二一
イタリ		四四
アメリカ		三九
ドイツ		二六

農産物價格の下落は、穀物及び纖維原料品を生産するヨーロッパ以外の諸國で特にひどかつた。カナダ、アメリカ、オーストラリア等々では農産物價格は二九年の初めから三二年初めま



です。平均五〇%からの下落をみた。この結果、これら諸國における農民の購買力はいきほい大削減をみねばならなかつた。(註)

(註) 米國農務省の推定ではこの間、その減退は五〇%にも達し、ドイツでは一九一九—三一年のあひだに約三〇%の減退をみたと云はれてゐる。

かうした大勢は三三年に入つても年初三、四ヶ月間はつゞいた。その後、弗貨の低落その他政府のインフレ政策により羊毛、棉花等の纖維原料品は一方生産減と他方工業國の需要増によつて持ち直しはじめたが、小麥その他の穀物の方はすでにみたやうに、三二—三三年における消費減のため過剰のストックに壓迫されて引續ぎ落勢をたどり、三四年下期において主として旱魃に基く生産減のため恢復の兆を示してゐるのみである。

世界市場における右の如き農産物價格の下落に關聯して、吾々は茲に次ぎの諸點を注意しなければならぬ。

(イ) 世界市場と國內市場(又は國內市場の孤立化)——農産物價格、特に穀物は世界市場でこそ會てない慘落をみたが、例の諸工業國における食糧品自給政策の結果これら諸國の國內價格は最近非常な激騰を示してゐること。

小麥生産の世界的配分状態が、食糧自給政策のため最近著しく變つたことは先に見たとほりであるが、この小麥において、右の價格事情は一ばん顯著である。これが一つの例證としてオーストリアについて見よう。

世界市場價格と比較したオーストリアの物價(一九二三—三一平均=一〇〇)

年次	農産物價格		工業物價格	
	オーストリア	世界市場	オーストリア	世界市場
一九二九年	一〇一	一〇〇	一〇〇	九八
一九三〇年	八七	八六	九七	八七
一九三一年	八七	六九	八一	六八
一九三二年	九五	五九	七四	六〇
一九三三年	八六	五六	七六	六五
一九三四(第一四半期)	八五	五七	七八	六七

(備考) 右表中世界市場價格はオーストリア通貨で表はしたもので、即ち最近においては内國市場價格とのヒラキは益々擴大してゐる。食糧自給政策を極端に押し進めてゐるドイツについてみれば尙更らこの傾向は強いであらう。

(ロ) 生産財と消費財——農産物價格が恐慌期において慘落した結果、生産財價格よりも消



費財價格の方が餘程ひどい低落をみると云つた會てない從來とは全く反對の新現象を呈したものである(註)。

(註) 即ち、景氣變動に對しては消費財よりも生産財の價格の方がはるかに敏感で且つその動搖の幅も上下兩方において遙かにひどいことは周知の事實である。早い話が、過去の恐慌についてみると、一九〇七—八年の恐慌にはアメリカの生産財は十五%、消費財は七%の低落、ドイツでは同じ恐慌で、生産財は二四%、消費財は九%の低落。一九二〇—二二年の恐慌では、アメリカ及びカナダ何れも同じ動きを示してゐる。

即ち、アメリカでは、一九二九年から三二年十二月まで消費財では三九%一の下落なのに、生産財の方は二五%四の下落に止まつてゐる。

アメリカにおける生産財價格と消費財價格

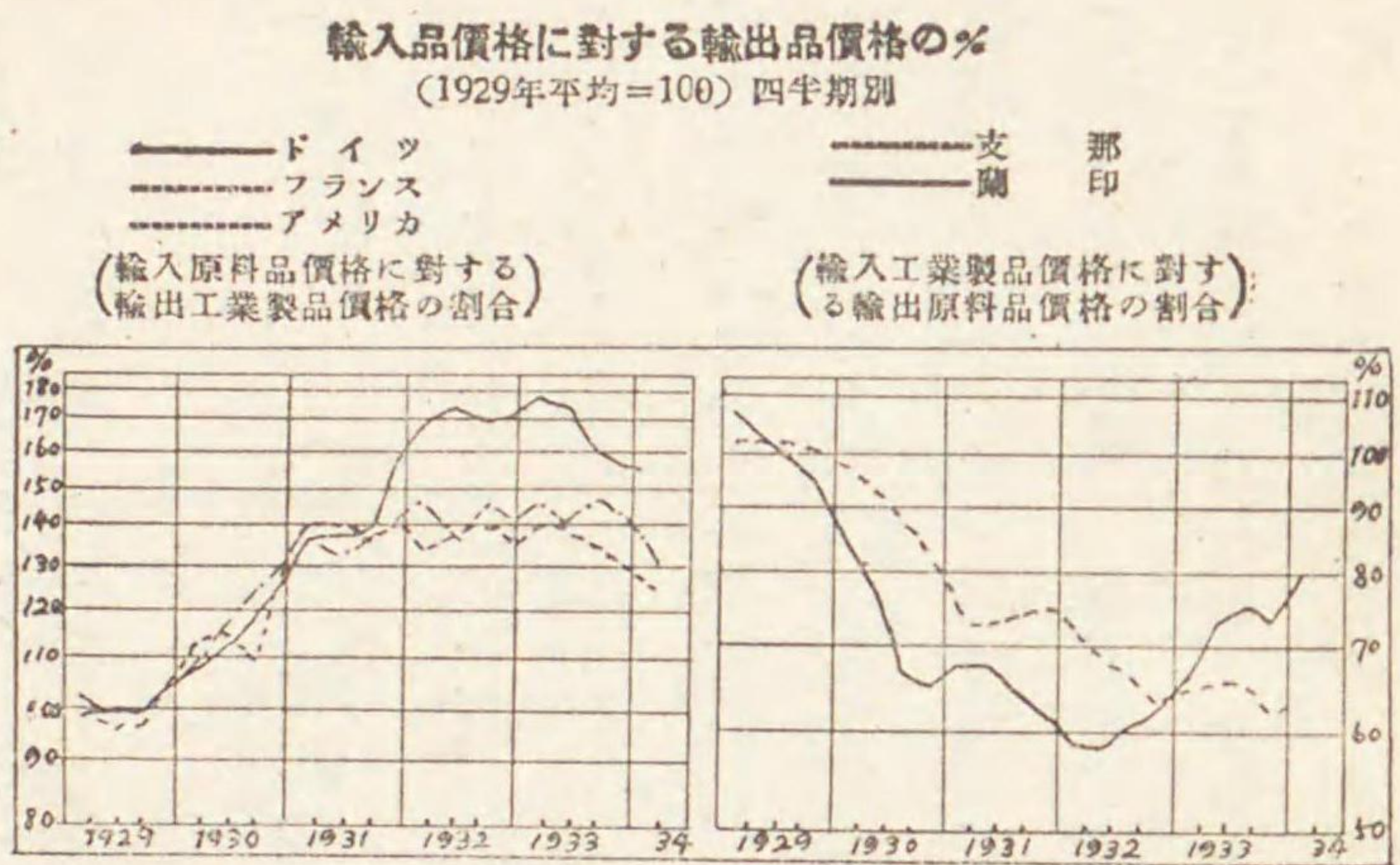
	一九二九年	一九三二年十二月	一九三三年十二月	上昇率(%)
生産財	一〇〇	七四・六	八一・三	九・〇
消費財	一〇〇	六〇・一	七〇・九	一八・〇

その代り、「恢復期」には又、消費財の方が餘計騰貴してゐる。ドイツでは三三年のあひだに、完全消費財の價格は二五の上昇をみたに反して、完全生産財價格の方は、一%の下落となり、又、カナダでもほぼ同様の動きをみせてゐる。

この結果、これらの國々では生産財及び消費財價格のヒラキは漸次狭められてきてはゐるが、恐慌前にくらべると、勿論、相對的に消費財の方が未だく低い。「生産財及び消費財價格」はこれを「工業品及び農産物價格」と書き換へても好い。

(ハ) 工業國と農業國——以上の事情の結果、工業國と農業國との商品交換關係を價格を通じてみると、恐慌前には工業國が「恢復期」には農業國が有利な地位にある。いま、工業國として獨、佛、米を、農業國として、支那、蘭印をとつてみると上の圖表の如くである。

即ち、工業國では兩商品價格割合は三二年にすでにパーに達し、その後漸次不利となり農業國では反對に三二年に底をついてその後有利に展開してゐる。表以外の工業國及び農業國についても大勢は同じである。





## 第十章 最近の勞働事情

## (一) 最近の景氣政策と勞働者との關係

以上みてきたやうに今度の恢復は各國の自國本位の景氣政策に基くものであり、これは必然に外國市場を犠牲としたものである。しかも各國景氣の内容をなすものは、失業救済的名目の下に行はれた公共事業であり、消費財生産部門よりは投資財及び投資産業部門であつた。景氣政策の性質上、必然にさうあらねばならなかつたのだ。ところで、かくの如きものとしての景氣恢復策は勞働者階級に對してどんな影響を與へたか？ 勞働者の状態は「景氣恢復」によつて改善されたか？ 今迄の恢復が主として生産財生産部門にあつたとすれば、これはやがて消費財部門にも及ぶものであるか？ かう行かなければ各國は依然として従來の政策を強化して行くより外に仕方はない。だが生産財部門のみを無暗に膨脹させることは經濟均衡の上から不可能である。大衆の購買力が終極的に決定的であるとすれば、やがてその膨脹は一段落を來さ

ねばならぬ。他面また、従來の景氣政策は國家財政に多大の負擔を要求して、これがため、ともすれば謂ゆる悪性インフレへの萌芽を育成せんとしつゝある。最近、アメリカ及び日本における金融資本の動向はこの悪性インフレの發生を抑制せんとするものに他ならない。

それは兎も角として、恐慌期並びに「恢復期」を通じて勞働者の状態はどうであつたか？

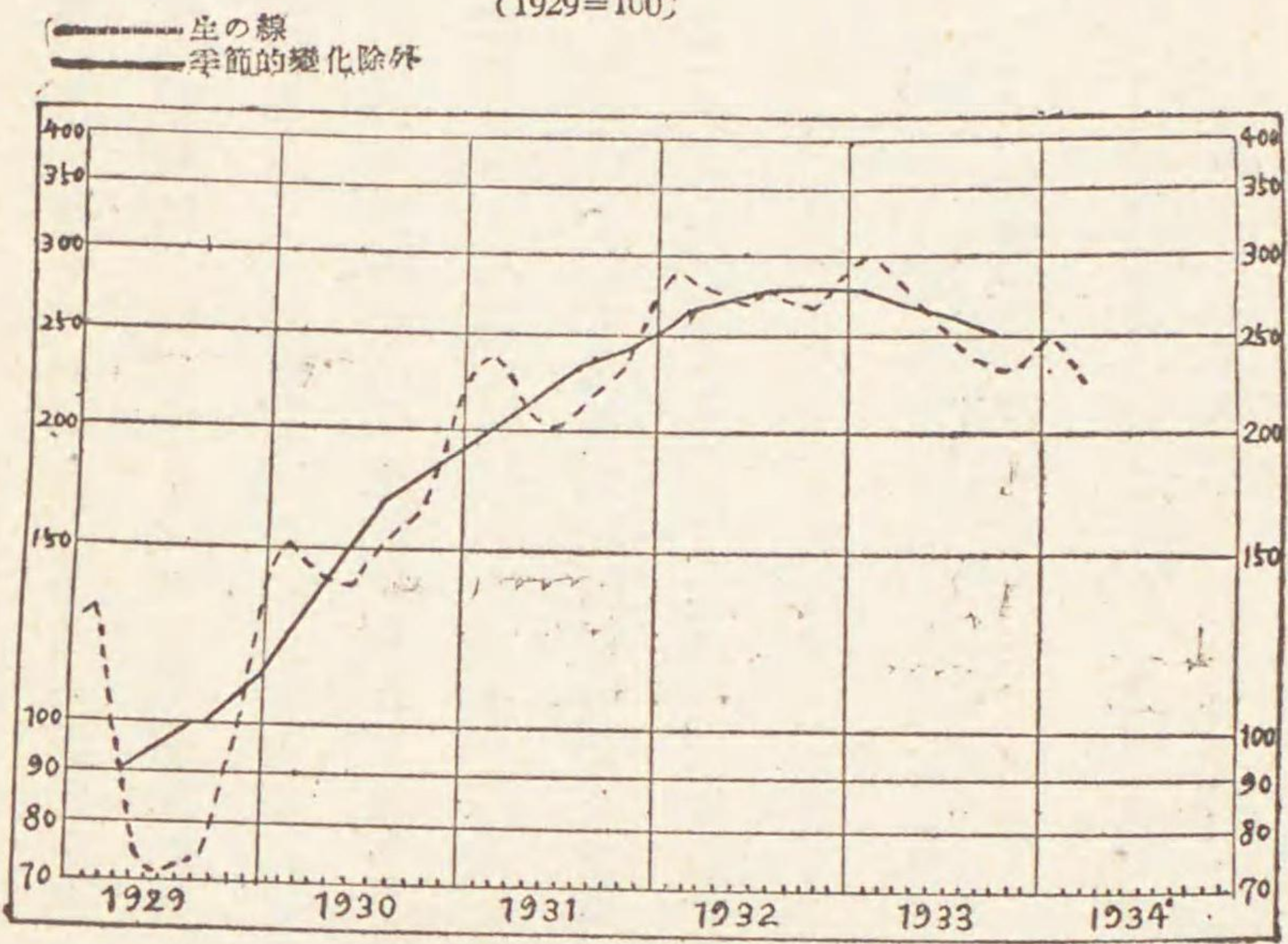
現行の統制經濟が恐慌前の合理化政策より進んで廣く國民經濟全般に注目し、就中、景氣政策として大衆購買力の増進に着目したかぎりにおいて、右の問題に答へることは、そのまゝ現に行はれてゐるものとしての統制經濟の批判ともなるべきものである。だが、茲ではこの問題に深く立入ることは未だできない。たんに、その一般的な批判的考察にとゞめておかねばならぬ。

## (二) 失業者數の減少

世界戰爭以後、世界資本主義は緩性的な大量の失業者をつくり出した。世界の生産界が戰前の水準を恢復して謂ゆる安定期に入り、「合理化景氣」に酔ひしれるやうになつてからも、世界の失業者は一向に減りはしなかつた。否、合理化は失業者を吸収するのではなくて、むしろ



世界失業指數（月平均）  
1929—1933  
(1929=100)



失業者を拵へることを使命としてゐた。現に國際聯盟「概観」一九三二—三三年の著者コンドリフは書いてゐる。「一九二五年から一九二九年に至る不況勃發以前の繁榮年間を通じ、六百萬乃至合計八百萬と測定される失業者が存在したことは意味深いことである」と。會て失業者は産業の豫備軍と呼ばれたが戦後は全く變質して失業常備軍となつてしまつてゐる。

恐慌前のこの失業常備軍が恐慌の發展とともに雪達摩式に殖えたことは云ふまでもない。恐慌の底

であつた三二年の春には二千萬——二千五百萬に達したと同じ所でコンドリフは云つてゐる。恐慌前の三倍以上に殖えたわけだ。ところが三三年一月には更らに殖えて三千萬人になつた。三三—三四年の「概観」は、これは季節的變化のせいでこれを除外すると世界の失業はすでに二二年の下期以來減少しはじめたと述べてゐる。その後、可成り減少はしたが、現在、それでも恐慌前の二倍乃至二倍半は優に取残されてゐるのである。

之を國別にみると、恐慌前から引きつゞき尤大な失業者を擁し、恐慌中に又著しい激増に悩まされたドイツでは、ナチス失業救濟策一天張りで押し通してきただけに、さすがその減少には驚くべきものがある。(こゝではドイツの失業統計の性質に就いては語らない)これを抜きにすれば、最も顯著な改善をみたものはスターリング・ブロックの諸國—カナダは別—である。デフレ政策を固守して行くヨーロッパの金ブロック諸國では大勢はむしろ悪化する一方だ。

主要國における失業者の推移

國	完全失業	部分失業	登録失業	完全失業率	完全失業率	完全失業率	失業者	手當を受くる失業者A	職業紹介所申込者B
英	千人	千人	千人	1.0%	1.8%	1.0%	千人	1.8	2.7
獨	千人	千人	千人	1.0%	1.8%	1.0%	千人	1.8	2.7
米	千人	千人	千人	1.0%	1.8%	1.0%	千人	1.8	2.7
日	千人	千人	千人	1.0%	1.8%	1.0%	千人	1.8	2.7
佛	千人	千人	千人	1.0%	1.8%	1.0%	千人	1.8	2.7











世界經濟の常識

化學	一五
木材	二五
織布	二五
織維	二八
アメリカ (平均時間収入一九二九年四月至五月乃至三三十二月)	
織維	十一%
食糧	〇
織布	二
製紙及印刷	四
化學	七

二四六

金屬	七
フランス (平均時間賃銀率一九三〇年十月至三三年十月)	
農業	二%
印刷	(男) 二
食糧	(〃) 五
金屬	(〃) 五
織布	(〃) 七
鑛業	(〃) 八
織維	(〃) 一〇

即ち、賃銀切下げはドイツ、日本において一番ひどく、(表にはないが、ポーランド、イタリア、オーストラリア、においても同様ひどい) 英、米、佛では割合に緩かである。ここで、ドイツの賃銀切下げがどうして一番ひどくならねばならなかつたかに就て立入る必要はなからう。(戦債及び賠償問題の頂参照)

(四) 全體としてみた労働階級の所得

一人當り又は定時間當りの賃銀は大勢としてこの「恢復期」にむしろ悪化したとして、然らば、全體としての労働所得はどう動いてゐるか? 統制經濟政策における労働政策が、失業救済を通じてむしろこの方面を狙つてゐるだけに、問題はそれだけ重要なわけだ。各國の官廳統計によると、多かれ尠かれ、全體としての労働所得は名目上殖えてきてゐるやうだ。

英米獨における名目労働所得 (一九二九年、四半期平均 1100)

四半期	英	米	獨
一九三〇年、一	九八	八二	九三
二	九六	八八	九四
三	九五	七六	九四
四	九四	七〇	八七
一九三一年、一	九一	五八	七七
二	九一	六四	七七
三	八九	五五	七六
四	八一	四七	六九

第三篇 最近世界經濟の特質



一九三二年、一	二	八九	四九	五七
一九三三年、一	三	八八	四三	五九
一九三三年、二	四	八七	三八	五九
一九三三年、三	一	八九	三九	五八
一九三三年、四	二	八八	三六	五四
一九三四年、一	三	—	四二	五八
一九三四年、二	四	—	五一	六一
一九三四年、三	—	—	五四	六一
一九三四年、四	—	—	—	六一

(備考) (イ) 英は二五〇磅以下の賃銀及び給料、季節的變化除外  
 (ロ) 賃銀所得者及び被備者の所得季節的變化除外せず  
 (ハ) 労働者被備者及び官吏、(年金除外) 季節的變化除外

(五) 生計費の昂騰

全體としての労働所得は名目的には殖える傾向にあるとして實質的にはどうか？ これを知る直接の數字とは見當らないが、多かれ尠かれ「恢復期」における物價騰貴を考慮すれば全體としての労働者の状態が改善されたかどうかは可成り怪しくなつてくるであらう。わけて、

別項でみたやうに、食糧品の自給政策は民國大衆の生活に對して漸くその壓迫を加重してゐるのである。試みに、主要國における最近の生計費指數の動きをみてみると、いづれも軒並みの上昇をみせてゐるのである。

主要國における生計費指數 (戦前=100)

年	英	米	獨	**佛	日
一九二九年	一六四	一七〇・八	一五四・〇	五五	一八一・四
一九三〇年	一五八	一六三・七	一四八・一	五八	一五五・一
一九三一年	一四七	一四八・一	一三六・一	五九	一三五・五
一九三二年	一四三	一三三・六	一三〇・六	五三	一三六・八
一九三三年	一四三	一三三・七	一八〇・〇	五二	一四三・六
六月	一三八	一八・三	一八〇・〇	五六	一四二・二
九月	一四一	—	一八・五	五六	一四六・八
十二月	一四三	—	二〇・六	五六	一四八・七
一九三四年	—	一三五・〇	—	—	—
三月	一五九	—	一九・九	五六	一四九・〇
六月	一四一	一三六・四	二〇・五	五三	一四七・九
九月	一四三	—	*二三・〇	五一	*一五〇・一



\*は十月。 \*\*フランスの一九三三年以降は當該月に終る四半期平均の指數。

統制經濟の進んでゐるドイツにおいて、今少しく立入つてみることは無益ではないと思はれる。けだし茲では勞働統制のことは姑くとするも、ナチス體制の下で、

(イ) 失業救濟一點張りの景氣政策が採られて、多數の失業者が吸収され、(ロ) 賃銀平準化の名の下に大々的な賃銀及び俸給の切下げが行はれるとともに、(ハ) 他方、農業更生食糧自給のために食糧品(及び原料品)の輸入制限乃至禁止が行はれ、食糧品價格の高騰となつて、結局これら積極及び消極の諸要因が交錯して勞働者階級に作用してきたのである。

さきに、ドイツにおける全體としての勞働所得が殖えたことを教へられたが、ドイツ統計局の統計では、なるほど賃銀所得は殖えてゐるが、失業保險その他年金支拂高も含めて勘定すると、勞働者及び俸給生活者の購買力は全體として却つて減少してゐる。そこにもナチス勞働政策の一端があらはれてゐるわけだ。

## むすび

二九年度の世界經濟恐慌は、人類が曾て經驗したもので、中で一番深刻且つ悪性のものであつ

た。それだけに各國はまたその恐慌切抜けに嘗てない辛慘を嘗めねばならなかつたし、又現に嘗めてもゐる。世界經濟は今や恐慌期を過ぎて、どちらかと云へば恢復への途を辿りつゝあると云ふことはできよう。しかし乍ら、その恢復も見た如く決して正常なものではない。金離脱國において多かれ尠かれ景氣は恢復したのに反し、金本位國では依然として景氣は悪化してゐる。それに又、現に行はれてゐるが如き統制經濟は、すでにその狹隘な國民主義の限界にぶつつかつて、早くも難關に遭遇しつゝある。最近、諸國に國際協調の機運が擡頭し、就中、國際通貨金融の安定を目的とする世界經濟會議が目論まれつゝあるのもその現れである。

この前の世界經濟會議は爲替安定に關する金本位國と離脱國との仲間割れでついに決裂に終つた。では來るべき世界經濟會議はどうなるだらうか？ 勿論、樂觀は斷じて許されない。もつとも、すでに經濟國民主義の狭い埒内で營養不良に陥りつゝある各國が、此點從來にくらべてその態度を變へるであらうことは確かだ。けれども經濟國民主義に立つ統制經濟の根據には抜き難いものがある。

むしろ、今後の世界經濟界の趨勢は、基本的には、國家的統制經濟を基礎として、その許す範囲内においてのみ、しかとその線に沿ひつゝ、國際的「協調」の途を採つて行くとみるべき



である。もちろん、かうした行方は必然にはちがひないが、その經濟的限界の比較的狭いところから、強力な國家權力による諸資本間、資本及び労働間の調整や、さてはブロック結成及び擴充策が今後益々強化擴充されて行かねばならぬことは改めて斷るまでもない。

昭和十年一月三十一日印刷  
昭和十年二月四日發行

『世界經濟の常識』奥附  
定價 一圓



著者 小島 精一

發行者 千倉 豊  
東京市京橋區京橋三ノ一

印刷者 山縣 精一  
東京市神田區神保町三ノ元

發行所

東京・京橋  
第一相互館

千倉書房

電話 (55) 三八一  
振替 東京九七八  
電話 (55) 三八一  
振替 東京九七八

山縣製本印刷株式會社印刷



(1) 錄目書圖房書倉千

高田保馬著	價格と獨占	價二・三〇 送料二二	小島昌太郎著	海運經濟要論	價二・五〇 送料二二
勝正憲著	税の話(十三版)	價一・五〇 送料〇八	水上鐵治郎著	英國の勞働組合	價一・五〇 送料〇四
那須皓著	日本農業論(再版)	價二・五〇 送料二五	小島精一著	産業合理化(十五版)	價一・五〇 送料二八
高橋龜吉著	資本主義頹廢の諸相	價二・二〇 送料二二	向井鹿松著	經營經濟學總論(十二版)	價一・五〇 送料二八
美濃部達吉著	行政裁判法	價二・八〇 送料二八	上野陽一著	産業能率論(十二版)	價一・五〇 送料二八
小泉信三著	マルクシズムとボルシェビズム(再版)	價二・三〇 送料二二	松永安左衛門著	産業改造の途(五十版)	價一・八〇 送料〇六
小島精一著	日本金融資本論(再版)	價二・五〇 送料二二	白柳秀湖著	親分子分(英雄編)(十版)	價一・五〇 送料二〇
報知新聞部編	談話室(四版)	價一・五〇 送料二〇	高橋龜吉著	『經濟國難來』(五版)	價一・五〇 送料二〇
高橋龜吉著	實用經濟學(五版)	價一・八〇 送料二二	報知新聞部編	談話室漫談篇(五版)	價一・五〇 送料二〇
平林初之輔著	文學理論の諸問題	價一・八〇 送料二二	平林初之輔著	近世社會思想講話	價一・八〇 送料二〇
井上準之助著	國民經濟の立直と金解禁(二百版)	價一・三〇 送料二〇	永井亨著	社會の話(五版)	價一・五〇 送料二〇
河合榮治郎著	英國勞働黨のイデオロギー	價一・五〇 送料二〇	中川靜著	廣告論	價一・五〇 送料二八
清澤淵著	轉換期の日本(五版)	價一・八〇 送料二二	山川均著	社會主義の話(六版)	價一・五〇 送料二〇
東京學藝課編	常識百話(五版)	價一・五〇 送料二〇	白柳秀湖著	親分子分(俠客編)(七版)	價一・五〇 送料二〇
白柳秀湖著	日本經濟革命史(五版)	價一・八〇 送料二〇	大崎厚夫著	世界を動かす十二傑(五版)	價一・五〇 送料二〇

(〇〇・一價各) 座講識常業商 自由册  
(〇一・料送册)

經營學の常識	神戶商業大學 教授 平井泰太郎著
商業學の常識	東京商大教授 內池廉吉著
會計學の常識	東京商大教授 吉田良三著
商業簿記の常識	中央大學 教授 黒澤清著
銀行簿記の常識	東京商大教授 太田哲三著
工業會計の常識	東商大專門部 教授 村瀨玄著
商業算術の常識	早大教授 小林行昌著
商業統計の常識	東京商大教授 藤本幸太郎著
販賣の常識	明治大學 教授 井關十二郎著
商品學の常識	東京商大教授 助教 佐藤弘著
商法の常識	法學博士 栗栖越夫著
生命保險の常識	早大教授 末高信著
貿易爲替計算の常識	計大講師 芳野國雄著



(3) 録目書圖房書倉千

著者	書名	定価	著者	書名	定価
前田美稻著	豫算の知識(三版)	送料一・五〇	林恒彦著	生活指導	送料一・五〇
佐藤弘著	世界經濟地理(八版)	送料一・五〇	帝國大學新聞編輯部編	大學の運命と使命	送料一・五〇
米野豐實著	サウエー卜經濟の實體	送料一・五〇	清澤洸著	アメリカを裸體にす(十三版)	送料一・五〇
中村第三著	販賣革命(六版)	送料一・二〇	三邊金藏著	會計監査(八版)	送料一・五〇
高木友三郎著	日本經濟の實體(四版)	送料一・〇〇	北林惣吉著	淺野總一郎傳(十版)	送料一・五〇
勝田貞次著	投資相談(十五版)	送料一・〇〇	報知新聞編輯部編	中小産業の活路	送料一・八〇
勝田貞次著	獨逸財界の機構(三版)	送料一・〇〇	勝田貞次著	不景氣時代の投資法(十版)	送料一・五〇
小池四郎著	社會主義か資本主義か	送料一・二〇	白柳秀湖著	食慾と愛慾(六版)	送料一・六〇
大辻司郎著	漫談集	送料一・〇〇	勝正憲著	營業收益稅の話(八版)	送料一・五〇
白柳秀湖著	社會展開の動力(三版)	送料一・六〇	國松豐著	工場經營論(六版)	送料一・五〇
上田貞次郎著	商工經營(十版)	送料一・五〇	青野季吉著	實踐的文學論	送料一・六〇
山田忍三著	百貨店經營と小賣業	送料一・五〇	北野大吉著	婦人運動の開祖 メリ・ウォールストンクラフト	送料一・五〇
後藤朝太郎著	哲人支那	送料一・五〇	小汀利得著	街頭經濟學(十九版)	送料一・五〇
報知新聞調査部編	ユーモア百話(六版)	送料一・五〇	近松秋江著	文壇三十年	送料一・八〇
小島精一著	アメリカ恐慌の見透し	送料一・〇〇	北林惣吉著	女の一人心	送料一・二〇

(2) 録目書圖房書倉千

著者	書名	定価	著者	書名	定価
勝正憲著	所得稅の話(七版)	送料一・六〇	長野朗著	支那の真相(五版)	送料一・五〇
報知新聞經濟部編	能率増進時代(五版)	送料一・五〇	武野藤介著	士の側面裏面(五版)	送料一・五〇
福田敬太郎著	市場論(九版)	送料一・五〇	上野陽一著	能率祕話(十二版)	送料一・五〇
政經研究會編	各政黨の主張(三十版)	送料一・三〇	中外經濟部編	經濟國難打開の途(五版)	送料一・五〇
土田杏村著	文明は何處へ行く(五版)	送料一・五〇	細田民樹著	黒の死刑女囚(五版)	送料一・五〇
増地庸治郎著	企業形態論(八版)	送料一・五〇	藤井悌著	英國労働黨の組織沿革政策	送料一・五〇
小島精一著	世界經濟と合理化運動(五版)	送料一・五〇	藤本幸太郎著	海上保險論(七版)	送料一・五〇
白柳秀湖著	親分子分(浪人編)(七版)	送料一・五〇	上野陽一著	家庭經濟の祕訣(十版)	送料一・九〇
小林行昌著	賣買論(九版)	送料一・五〇	勝正憲著	企業と租稅(七版)	送料一・五〇
石濱知行著	アメリカ資本主義發達史(四版)	送料一・七〇	報知新聞經濟部編	經濟相談(十版)	送料一・五〇
小林行昌著	關稅と物價	送料一・五〇	堀眞琴著	國家論	送料一・三〇
末弘嚴太郎共野間海造編	農林法規集	送料一・五〇	堀光龜著	海運(八版)	送料一・五〇
小島精一著	企業統制論(七版)	送料一・五〇	增井幸雄著	陸運(七版)	送料一・五〇
神長倉眞民著	財界巡禮記(五版)	送料一・五〇	山川均著	勞働組合の話(四版)	送料一・五〇
報知新聞調査部編	ナンセンス・ジャパン(五版)	送料一・五〇	世界經濟研究所編	世界經濟(總觀)(七版)	送料一・五〇







(6) 録目書圖房書倉千

著者	著書	定價	著者	著書	定價
青水元壽譯	經濟の國家統制(五版)	價二・〇〇 送料・二六	小汀利得著	漫談經濟學(卅五版)	價一・五〇 送料・一〇
高島佐一郎著	金本位制動搖と日本金融の將來(八版)	價一・二〇 送料・一〇	中外商業編	政治家群像(五版)	價一・五〇 送料・一〇
原口亮平著	簿記學	價一・五〇 送料・一八	上野陽一著	經營作戦(七版)	價一・五〇 送料・一〇
白柳秀湖著	日本富豪發生學(開族財權の卷)	價一・六〇 送料・一四	森山四郎著	滿蒙小資本開業案内(卅版)	價一・二〇 送料・一〇
小原喜三郎譯	物富み人富まざるの矛盾	價一・〇〇 送料・一〇	高木友三郎著	東亞モンロー主義(への幕進)(廿版)	價一・三〇 送料・一〇
高橋龜吉著	世界破局と日本經濟の變革(七版)	價一・五〇 送料・一四	佐々木良雄著	販賣秘法	價一・五〇 送料・一〇
保科貞次著	空襲!!(廿版)	價一・〇〇 送料・一〇	平井泰太郎著	經營學の常識(四版)	價一・〇〇 送料・一〇
猪谷善一著	アジア經濟の展望	價一・五〇 送料・一〇	ロオレンス著	此の金恐慌(五版)	價一・二〇 送料・一〇
洪純一著	日本財政經濟論(四版)	價三・〇〇 送料・二四	渡邊進譯	相場戰術(十五版)	價一・八〇 送料・一〇
伊豆富人著	安達さんの心境を語る(八十版)	價〇・三〇 送料・一〇	勝田貞次著	我財界の緊急對策(インフレーションとは何か?)	價一・五〇 送料・一〇
森田久著	弗賣買の解剖(百版)	價〇・三〇 送料・一〇	武藤山治著	産業心理學	價一・五〇 送料・一〇
平井泰太郎著	經營學文獻解説	價一・五〇 送料・一八	高垣寅次郎著	滿洲國の開發と日本經濟の動向	價一・二〇 送料・一〇
中野正剛著	轉換日本の動向(廿版)	價〇・三〇 送料・一〇	金子弘著	變革期の財界(其對策)	價一・五〇 送料・一〇
アインツッヒ著	世界金融恐慌の真相	價一・二〇 送料・一〇	宇野木忠著	伯樂II 澁澤翁(十版)	價一・〇〇 送料・一〇
木村禧八郎譯	金再禁止と我財界の前途(百版)	價〇・三〇 送料・一〇	高橋龜吉著	變革期の財界(其對策)	價一・五〇 送料・一〇

(7) 録目書圖房書倉千

著者	著書	定價	著者	著書	定價
白柳秀湖著	現代財閥罪惡史(卅版)	價一・六〇 送料・一〇	高島佐一郎著	金本位の後に來るもの(八版)	價一・八〇 送料・一〇
土田杏村著	現代世相論(廿版)	價一・五〇 送料・一〇	増地庸治郎著	商業通論	價一・五〇 送料・一〇
河合良成著	非常時の經濟對策(七萬)	價〇・三〇 送料・一〇	山本勝市著	經濟計算	價一・五〇 送料・一〇
小島精一著	日本計畫經濟論(十版)	價一・八〇 送料・一〇	山崎靖純著	圓爲替はどなる(卅版)	價〇・三〇 送料・一〇
木村毅著	S・O・Sのアメリカ	價一・五〇 送料・一〇	小原喜三郎著	南北分水嶺を越えて	價一・〇〇 送料・一〇
勝田貞次著	富の分布か新平價か?	價一・五〇 送料・一〇	白柳秀湖著	親分子分(政黨編)	價一・五〇 送料・一〇
ベイヤハ著	景氣轉換論	價一・二〇 送料・一〇	勝正憲著	相續税の話	價一・五〇 送料・一〇
横尾惣三郎著	農村非常對策(廿萬)	價〇・一〇 送料・一〇	安部磯雄著	産業奉還論	價〇・三〇 送料・一〇
マハン大佐著	米國海軍戰略	價二・五〇 送料・二〇	尾崎行雄著	世界審判の岐路に立つ日本	價〇・三〇 送料・一〇
尾崎中佐譯	歴史は繰返すか	價〇・三五 送料・一〇	清澤冽著	アメリカは日本と戦はず(廿版)	價一・五〇 送料・一〇
長崎英造譯	經濟學の基礎知識(十五版)	價一・五〇 送料・一〇	高橋龜吉著	景氣轉換期	價一・五〇 送料・一〇
高橋龜吉著	日本再建論(十萬)	價〇・三〇 送料・一〇	小島精一著	日滿經濟ブロック問答	價〇・三〇 送料・一〇
山道襄一著	購買力補給案(十五版)	價一・五〇 送料・一〇	藤山雷太著	鮮支遊記	非賣品
谷口吉彦著	經營學入門	價二・三〇 送料・一〇	野村證券部	爲替低落と上向期の主要産業	價二・三〇 送料・一〇
平井泰太郎著	計畫經濟と管理法	價一・五〇 送料・一〇	喜多壯一郎著	ジャアナリズムの現象	價一・五〇 送料・一〇



(8) 録目書圖房書倉千

宇原義豊著	日本産業革命論	價二・〇〇	圓地與四松著	インフレ景氣論(五版)	價一・五〇
佐々弘雄著	政局危機の動向	價一・五〇	上野陽一著	能率百話(八版)	價一・五〇
マツケンナ著	金融政策十四年	價一・五〇	高橋龜吉著	非常時經濟(十五版)	價一・五〇
前馬治一著	日本外交の血路(九版)	價一・五〇	鎌田澤一郎著	朝鮮は起ち上る(廿版)	價一・五〇
白柳秀湖著	『親分子分』英雄編(普及版)	價一・〇〇	谷口吉彦著	爲替理論と爲替問題(廿版)	價二・三〇
白柳秀湖著	『親分子分』俠客編(普及版)	價一・〇〇	清澤 洌著	非常日本への直言(六版)	價一・五〇
白柳秀湖著	『親分子分』浪人編(普及版)	價一・〇〇	勝田貞次著	金本位恐慌後(十二版)	價一・五〇
太田哲三著	會計制度論	價一・五〇	小島精一著	金融恐慌論(十版)	價一・五〇
勝田貞次著	1933 投資相談(六十五版)	價一・五〇	木村 毅著	世界の女性を語る	價一・五〇
山川 均著	世相を語る X Y Z の對話	價一・五〇	畑 桃作者	國策を守れ	價〇・五〇
土田杏村著	思想・人物・時代(十五版)	價一・五〇	佐々弘雄著	街頭政治讀本	價一・五〇
中外商業欄編	經營秘話	價一・五〇	黒田禮二著	革命三人男	價一・五〇
清水芳太郎著	日本經濟革命論(八版)	價一・五〇	澤田 謙著	獨裁期來!	價一・五〇
山崎幸四郎編	農村副業と共同販賣	價一・五〇	高橋龜吉著	清算期世界經濟と日本	價一・五〇
小汀利得著	金より物へ(七十五版)	價一・五〇	白柳秀湖著	左傾兒とその父	價一・五〇
モンカド著	亞細亞	價一・五〇	室伏高信著	マルクスを乗り越えて	價一・五〇
清澤 洌著	モンロー主義(六版)	價一・五〇			

(9) 録目書圖房書倉千

久保久治著	金融革命宣言	價一・二〇	室伏高信著	現代文明講話	價一・五〇
高島佐一郎著	金融景氣とその限界	價一・五〇	栗林正修著	投資者必携(再版)	價一・五〇
佐々木良雄著	科學的商店經營法(卅五版)	價一・五〇	具島兼三郎著	フアツシスト國家論	價一・五〇
黒田禮二著	最後に笑ふ者	價一・五〇	谷口吉彦著	國際經濟の理論と問題	價一・五〇
上野陽一著	能率茶話	價一・五〇	吉村觀水著	觀相科學(十五版)	價一・五〇
勝田貞次著	投資秘話(廿五版)	價一・五〇	ジョンソン著	英帝國の野心	價一・五〇
黒澤 清著	會計學(三版)	價一・五〇	佐々木良雄著	實益的商店經營學	價一・五〇
保科貞次著	空襲(普及版)	價一・八〇	中野正剛著	國家改造計畫綱領(百版)	價一・五〇
渡邊 進著	ハッ・世界經濟新體系論	價一・二〇	清水芳太郎著	古今偉人會議	價一・三〇
平井泰太郎著	經濟座談	價一・五〇	東京商工會議所調査部編	明日の貨幣(卅版)	價一・〇〇
小島精一著	世界一九三六年!(卅版)	價一・五〇	仲西初五郎著	商賣のコツ(廿五版)	價一・五〇
小島昌太郎著	日本金融工作論(再版)	價一・五〇	清澤 洌著	革命期のアメリカ經濟	價一・五〇
菅谷北斗星著	棋道秘話(十五版)	價一・五〇	竹内謙二著	貿易統制論	價二・五〇
白柳秀湖著	世界經濟開爭史(再版)	價一・六〇	久原房之助著	皇道經濟論(七十八版)	價一・三〇
清水芳太郎著	金力・權力・武力	價一・二〇	土田杏村著	明日に呼びかける	價一・五〇
田中滿三著	科學的工場經營法(再版)	價二・〇〇	勝田貞次著	一九三四年投資相談	價一・五〇



(10) 録目書圖房書倉千

上野陽一著	能率文明論	價一・五〇 送料一・〇〇	尾崎行雄著	近代快傑錄(六十版)	價一・二〇 送料一・〇〇
小島精一著	日本經濟の伸展性	價一・六〇 送料一・〇〇	村本福松著	經營學原論	價一・五〇 送料一・〇〇
細野孝一著	各國インフレーションの形勢の研究	價三・〇〇 送料一・〇〇	大野木繁太郎著	世紀の支配者ハースト	價一・五〇 送料一・〇〇
關根郡平著	將來の海軍問題	價一・〇〇 送料一・〇〇	白柳秀湖著	維新革命前夜物語	價一・五〇 送料一・〇〇
三田同學會著	國際經濟戰略(三版)	價二・〇〇 送料一・〇〇	坂口二郎著	現代新聞論	價一・五〇 送料一・〇〇
白柳秀湖著	日本女性史話(五版)	價一・五〇 送料一・〇〇	谷口吉彦著	日本經濟の進出と經濟國策の將來	價一・二〇 送料一・〇〇
小島經濟研究所著	膨脹財政の建設的役割	價一・三〇 送料一・〇〇	高島佐一郎著	新貨幣金融論	價二・二〇 送料一・〇〇
勝田貞次著	平價切下に備へよ(四百版)	價一・〇〇 送料一・〇〇	畑石輝治著	工業經濟の話	價一・五〇 送料一・〇〇
黒田禮二著	金世紀の始まる頃	價一・八〇 送料一・〇〇	高橋龜吉著	ソシアル・ダンピング論	價一・五〇 送料一・〇〇
木村毅著	西郷南洲(七版)	價一・六〇 送料一・〇〇	小笠原秀昱著	法城崩る	價一・五〇 送料一・〇〇
渡邊鏡藏著	中小商工業死活の問題	價一・五〇 送料一・〇〇	高橋龜吉著	實踐金融論	價二・五〇 送料一・〇〇
茂木惣兵衛著	來るべき世界の姿	價一・五〇 送料一・〇〇	報知新聞經濟部著	景氣と相場の見方	價一・二〇 送料一・〇〇
勝田貞次著	雜株投資案内(十五版)	價一・五〇 送料一・〇〇	木村禮八郎著	圓・弗・磅・法の話	價一・八〇 送料一・〇〇
高橋龜吉著	世界資本主義の前途と日本(三版)	價一・五〇 送料一・〇〇	岩井良太郎著	三井・三菱物語	價一・五〇 送料一・〇〇
中外商業經濟部著	日本商品の話(十二版)	價一・六〇 送料一・〇〇	深尾須磨子著	マダム・Xと快走艇	價一・〇〇 送料一・〇〇
岩井良太郎著	財界新聞將傳(九版)	價一・五〇 送料一・〇〇	清澤 洌著	激動期に生く	價一・五〇 送料一・〇〇

(11) 録目書圖房書倉千

白柳秀湖著	山水と歴史	價一・八〇 送料一・〇〇	白柳秀湖著	日本民族論	價一・五〇 送料一・〇〇
杉山茂著	日本式收支簿記	價一・〇〇 送料一・〇〇	和田日出吉著	福澤諭吉と弟子達	價一・五〇 送料一・〇〇
栗栖越夫著	商法の常識	價一・〇〇 送料一・〇〇	本莊可宗著	不惑の人生觀	價一・五〇 送料一・〇〇
小島精一著	岡田内閣と一九三五年	價一・五〇 送料一・〇〇	村松梢風著	人間苦闘史	價一・五〇 送料一・〇〇
高田保馬著	貧者必勝	價一・六〇 送料一・〇〇	芳野國雄著	貿易爲替計算の常識	價一・〇〇 送料一・〇〇
鎌田澤一郎著	滿洲移民の新らしき道	價一・二〇 送料一・〇〇	龜田豐治朗著	生命保險論	價一・五〇 送料一・〇〇
瀧呂木光治著	將棋相談	價一・五〇 送料一・〇〇	清水芳太郎著	日本産業戰略	價一・五〇 送料一・〇〇
菅谷北斗星著	軍擴景氣の發展と投資法	價一・五〇 送料一・〇〇	高橋龜吉著	滿洲經濟と日本經濟	價一・五〇 送料一・〇〇
齋藤恒之助著	景氣變動の見方	價一・五〇 送料一・〇〇	波多野鼎著	景氣論	價二・〇〇 送料一・〇〇
木本龍太郎著	米高と滿安の見方	價一・〇〇 送料一・〇〇	岩井良太郎著	日本獨占産業物語	價一・五〇 送料一・〇〇
澤村克人著	思ひ出を語る	價一・〇〇 送料一・〇〇	上野陽一著	人を説く法	價一・五〇 送料一・〇〇
讀賣新聞編著	生命保險の常識	價一・〇〇 送料一・〇〇	板橋菊松著	社債の實際知識	價一・六〇 送料一・〇〇
末高信著	利廻相談	價一・五〇 送料一・〇〇	村松梢風著	唐人お才	價一・五〇 送料一・〇〇
前田梅松著	産業貿易觀	價一・五〇 送料一・〇〇	鈴木梅四郎著	立憲哲人政治	價一・〇〇 送料一・〇〇
安川雄之助著	明日の小賣店經營	價一・二〇 送料一・〇〇	芳野國雄著	利廻採算法	價一・五〇 送料一・〇〇
高田琴三郎著					







